
春と秋

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春と秋

【Nコード】

N8880Y

【作者名】

まるは

【あらすじ】

怒りのために命を捨てようとした娘と、それを拾った男。男が彼女に教えてくれたのは「ぶつとばし方」だった。

大きな町の「外」で暮らす、二人の物語。

とりあえず、1章完結方式でちまちま書いていきます。まったりとお付き合いください。

千の秋 0

時は、仁大皇帝じんたいの御世。

東は東疎とその地から、西は間奈留まなるの果てまでをひとつとした、大神おおか来むらという国があつた。

多くの戦乱を経て統一されたその国は、その頃の名残で各町は大きな壁で囲まれ、人々はその中で生活をしていた。

田畑までも内包する巨大な町は、外敵を完全に遮断し、長い籠城にも耐えられるように作られているため、よその町へ行く用がない限り出る必要はない。

一生を、町の中で終える者も数多くいる。

他の町へ行く時は、役所へその旨を申請し、許可証をもらわねばならない。

ならず者を、町の中に入れないようにするためである。

では、町の外に住んでいる者はいないのか。

答えは 「いる」、だ。

山や海での生活を生業とする者。

よその地から、移民してきた者。

町から、何らかの理由で許可証なしで出て行った者。

彼らは、「外」の人間として、厳密に「内」とは違う法体系の中に置かれることとなる。

これは、そんな町の「外」に住む者の物語。

千秋 1

「だめだ、だめだ！ 許可証を持たぬ者を、入れることは出来ん！」

ぬうと立つ門番二人は、千秋ちあきの前に立ちふさがっていた。

標準よりも小さい16歳の少女にすぎない彼女からすれば、彼らは鬼のように大きく恐ろしい者に見える。

しかし、通してもらえないからと言って、「はいそうですか」と、回れ右出来ない理由が、千秋にはあった。

「どうしても、内町うちまちのお役所に、申し上げたいことがあります。それさえ終わればすぐに出ますので、どうかお願いします！」

大男の背にそびえるのは、門。

その門の両側に広がる、高い高い石組の壁。

堅牢な壁で覆われた、守られた町。

千秋は、その中にどうしても入らなければならなかった。

粗末な着物を帯一本で縛りつけただけの、貧乏農民の末娘である彼女は、鼻緒のちぎれた草履を手に持ち、門番の頑なな心を何とか緩めようと必死に訴える。

対する門番は、この国の軍では一般的な、鑄造された量産型の兜と鎧を身につけている。防具だけでなく、槍まで持っている。

兜のてっぺんから伸びているひれは、色あせた緑色だ。

元々は鮮やかな緑で、西域を担当する軍の所属であることを表していた。

この町の治安を維持するために、中央から任を与えられた者たちだ。

彼らより身分の高い者からの命令、あるいは相当な額の賄賂でも積まない限り、彼らの心を動かすことは難しいだろう。

だが、その両方を持ち得ない千秋は、ただ懸命にお願いするしかないのだ。

「だめだと言っておるだろうが！」

すがりつこうとする千秋を、門番はいともたやすく跳ね飛ばした。

軽い彼女の身体は、まるで毬のように放り出され、地面にすっ転がる事になる。

身体のうちこちが痛むが、千秋はそれでも諦めきれない。

立ち上がり、門番にもう一度懇願しようとした時。

「これ以上、我々の手を煩わせると、本当に容赦しないぞ」

門番は、手に持った槍を構える素振りを見せた。

千秋は、さすがに躊躇した。

ここで、自分が死んでは誰が役所へ訴えるのか。

だが、引き下がっては、結局同じことになる。

千秋は、着物の袂たもとから、手紙を引っ張り出した。

彼女の父が書いたものだ。

役所に訴えたいことの仔細が、ここに記されている。

自分が入れなくとも、この手紙が届けば何とかなるかもしれない。

「では、これを役所の方に渡してもらえませんか？」

紙を手に入れるのも難しい中、何とか用意したものである。

しかし、門番二人は顔を見合わせ、嫌そうな表情を浮かべてみせるではないか。

「軍人を、タダ働きさせる気か？」

告げられた言葉は、堂々と賄賂を要求するものだった。

人はともかく手紙は入れてやらないでもないが、タダでは駄目だと言っているのだ。

千秋は、上に立つ者の中にひどい人間がいるのは知っていた。

下の者を虐げ、踏みつけることなど何とも思っていない人種だ。

だが、そんな人間ばかりではないと、心のどこかで思ってもいたのだ。

何故なら、幼少の時に過ごした町では、偉い人の中にもいい人がいたのを見て来たから。

だが、千秋の前に立ちふさがるこの軍人たちは、平民よりほんのちよつとだけしか偉くないにも関わらず、腐りきっている。

ギリと、奥歯を噛みしめて、彼女は怒りを喉元までせり上がらせた。

次に彼らが言うことを、千秋は知っている。

「まあ、そうだな。金がないって言うんなら……身体で払ってもいいぞ」

視線が、彼女の身体を舐めるように動いた。

痩せて、凹凸など皆無に等しい彼女の、こんな鳥ガラのような身体であっても、そんな目で見る事が出来るのだ。

ああ。

どこも、同じだった。

千秋は、手紙を握りしめて怒りにわななく。

喉元でとどめていた怒りが、いまにも唇から炎のように飛び出しそうになるのを感じながら、彼女は一步踏み出していた。

こんな世になんて。

「お金の代わりに、私の命を差し上げます……」

こんな世になんて　未練なんかない。

千秋は、門番に向かって駆け出した。

反射的に突き出される槍の先に。

彼女は。

飛び込んだ。

千秋の世界は、一瞬にして目まぐるしく変化した。

自分の身体が突然一回転し、鈍く激しい音と共に地面に落ちていたのだ。

地面に尻もちをついたまま、彼女はほけつとその光景を見ていた。

自分と槍の間に立つ、炭を背負った後ろ姿。

槍の穂先はへし折られ、千秋の足元に力なく落ちていく。

わなわなと震えている軍人たちを放置して、その人は千秋の方を振り返った。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

明るくあっけらかんとした声の、糸目の男がそこにはいた。

千の秋 2

「ありがとうございます」

千秋は、おそるおそる礼を言った。

山の中腹にある炭焼き小屋らしき粗末な家は、建てられている場所こそ違え、自分の家を彷彿とさせる。

煮炊きに使われるだろう囲炉裏に火が入れられると、疲れきった身体がほっとするのが分かる。

「お礼なら、もう何度も聞いたから、もういいよ」

桶の水を鍋に入れ、糸目の男はそれを囲炉裏へと吊るす。

門の前で大立ち回りをしでかしてしまった彼と千秋は、すぐさま門番に取り押さえられそうになり、慌てて逃げ出したのだ。

千秋が逃げたというよりは、この男に手を引つ張られ、付き合い合わせたと言った方がいいか。

いざ、町から離れてしまうと、千秋は途方に暮れてしまった。

目的を果たすことも出来ず、死ぬことも出来ず、不完全燃焼の怒りの行き先はどこにもなくて、本当に生きた屍のように突っ立ってしまったのである。

そんな千秋の頭に、糸目の男はぽんぽんと手を置いてくれた。

「とりあえず、僕の家に行こうか」

魂が抜けたままの彼女の手を、炭を背負った男が引っ張って行ってくれる。

きっと、彼は町へ炭を売りに来たのだろう。

町だけでは賄えない商品を売る者は、町に入る許可証を得ることが出来る。

おそらく、彼はそれを持っていたに違いない。

なのに、千秋の無謀な事に飛び込んできてしまったせいであんなことになり、しばらくは町への出入りは出来ないだろう。

とぼとぼと手を引かれて歩きながら、少しずつ正気に戻ってきた千秋は、目の前の男に申し訳ない思いでいっぱいになった。

「どうして……止めたんですか？」

助けてもらって余計なお世話と言いたくはなかったが、結果的には男にとっても千秋にとっても良い結果にはなっていないように思えた。

「言っただろう？ 怒りの使い方を間違えてるって……あそこで君が、怒りに任せて死んだって、ただの犬死にじゃないか」

握られた手に、少し力がこもった。

背はそれほど大きい訳ではないが、男の手は大きく、そして温かだ。

悪い人ではないのだろう。

いや、きつといい人だからこそ、無謀な千秋を身体を張って止めてくれたに違いない。

ただの犬死に。

それは、心のどこかで分かっていた。

自分の死など、あの軍人たちの心を動かす材料にはなりはしないのだ。

もう片方の手に握った父の手紙を、千秋はもつとぎゅっと握りしめた。

「10年くらい前から、外村そとむらがたくさん作られ始めたんです」

千秋は、炭の背に向かって呟いていた。

彼の背は、俗世の人のように思えなかったのだ。

貧しい者も助けてくれる、聖人が菩薩の化身ではないかと。

「新しく土地を開墾して田畑に変える。開墾した者に土地は与えるということ、内町うちまちに住んでいた次男坊の父は、喜んでその外村作りに参加しました」

千秋が、小さい頃の事だ。

内町に人が増えすぎ、食料の自給が困難になってきたため、国はその両方を同時に解消するべく政策を立てた。

内町の人手を外に出し、彼らに農地を作らせるという方法だ。

ただで土地が手に入る。

それは、跡を継がない次男以降の男たちの、心を動かすものがあったようだ。

家族を連れて彼らは外に出て、苦勞して苦勞して田畑を開墾し、そしてそこに作物を実らせるに至った。

だが、政策には無責任な部分があった。

国は、新たに開墾した田畑から、面積に応じての一定の税金を取り立てることのみにしか興味がなかったのだ。

新たに出来た外村の秩序や治安は、全て地方の権力者をむらおき村長に据えて、彼らに任せたのである。

確かに、土地はそれぞれの者に与えられたが、同時に村長は重税も課した。

とても、家族が食べて行けないほどの税の重さだ。

外の村は壁に囲まれていないため、人々を守るために強い者を雇わなければならないという理屈で、国のものとは別に税を徴収した

せいである。

雇われた荒くれ者たちは、治安を守ると同時に、彼ら自身が治安を乱す種となり、ちよつとでも逆らう家があれば、ひどい目にあわされることとなった。

更に、農民の足元を見るかのように、こつ言い放つたのだ。

『税金が納められない者は、娘を納めよ。娘を納めた者は、向こう2年の税を減免してやろう』

農民たちは、怒り狂った。

反乱を企てた。

だが、彼らはそれを予見していたのか、『不穏な動きをしている輩について報告した者も、1年の税を減免してやる』とも言ったのである。

そのせいで、他の村人を売る者が出た。

元々、開墾のために集まった者たちであり、古くからの付き合いがあるわけではなく、一枚岩ではないところを狙われたのだ。

こうして、村は横のつながりも断たれ、誰も信じられない状態になっていき、ついには食うものに困って娘を差し出し始めたのだ。

こうなると、未来は暗く閉ざされたものとなる。

圧制を覆すことも出来ず、かといって、娘の数にも限りがある。

餓死者が出たり、逃亡者も出たりする。

耕す者のいなくなった土地には、また何も知らない内町の人間たちが、騙されて連れてこられるのだ。

横でつながれないのならばと、千秋の父は内町の役所へと窮状を訴える直談判の手紙を書いた。

それを、家にいる最後の娘に託したのだ。

最後の娘。

それは、もし一家が重税に押しつぶされそうになった時に、姉たちのようにあの家に差し出され、慰み者にならねばならないということ。

そうなる前に。

父の手紙を持って、千秋は走った。

一番近い内町まで丸一日、握り飯一つと川の水だけでようやくたどりついたのだ。

結果は、ひどいものだったが。

そして、死にそこなった千秋はいま、糸目の男と向かい合っている。

怒りの余り、この世を見限った彼女の前にいるのは、菩薩の化身

なのだろうか。

ゆっくりと鍋の湯が沸いていくのを、千秋は見るともなしに見ていた。

「思ったんだけどね」

毛先の跳ねたざんばら髪を、男は一度かきまわした。

声は、至って明朗だ。

千秋の村の不幸な窮状を聞いてなお、そんなものに振りまわされる様子などない。

そして。

「悪い奴は、ぶつとばしていいと思うよ」

あっけらかんと、とんでもないことを口にしたのだった。

千の秋 3

「ぶっ……とばす？」

思わず、千秋は頓狂な声で返してしまった。

余りに明るく、しかしひどい内容を聞いたからである。

「そう、ぶつとばす」

ぎゅっと拳を作って、男はにこにここと笑う。

彼女は、思わずその拳を見つめた。

それは、この人がぶつとばしに来てくれるということだろうか、と。

彼は炭焼き職人のようだが、非常に強い力を持っているように見える。

本当に間近だった檣から彼女を引きはがして転がしつつ、その穂先をへし折ったのだから。

糸目の男が本気になったら、少々相手など本当にぶつとばせそうだ。

「ああ、違っよ」

千秋の瞳に浮かびかけた、希望のようなものを見て取ったのだろ

うか。

彼は、ぱつと自分の拳を解いた。

「拳でぶつとばすのは……」

にこにこしながら彼は、指でちょいちょいとこちらを指してくる。

そう、千秋の方を。

思わず、彼に差されている先を見た。

それは 自分の右手だった。

手を開いて閉じて、それからもう一度男の方を見ると、うんうんと頷いている。

「そうそう、ぶつとばすのは……君の拳で、だよ」

時が止まる、瞬間だった。

考えたこともないことだったし、出来るとも思えないことだ。

千秋は、ただの農民の娘に過ぎない。

村に圧政を強いる屋敷に乗り込んだところで、拳一発当てることも出来ないのは明白だった。

「で、できま……」

「出来るよ。死ぬ気になれば、出来る」

否定の言葉は、より強い肯定に飲み込まれる。

はっと、声に引き寄せられるように、彼を見た。

笑ってはいるが、冗談ではない。

明るくはあるが、茶化してはいない。

彼は、本気で言っているのだ。

「ぶつとばし方は……そうだね、僕が教えてあげよう」

糸目の目を更に糸にしながら、彼は千秋に微笑んでくれた。

そこから、千秋と『糸目先生』の付き合いが始まった。

誰に習ったのだろう。

糸目先生は、武道の心得があつた。

しかも、自分より大きい者を簡単に転ばせることが出来る、まるで魔法のような技だ。

千秋は、何度もその身で練習台となり、気づいたら地面にすっ転

んでいる羽目となる。

この技を会得できれば、彼女も大男相手に怯む必要もなくなるかもしれない。

そんな夢を、千秋は彼の技に見た。

一度は捨てた命なのだから、血のにじむ努力をすれば、一撃浴びせられるかも、と。

死ぬのは、その後でも出来る。

そう彼女は、開き直った。

のだが。

「うひゃあ!」

千秋は、奇妙な感触に飛びあがることとなる。

いつの間にか後ろに回った糸目先生が、千秋の両脇から手を回し、彼女の胸に触っていたからだ。

「せ、先生！ 何するんですか!」

反射的に肘鉄を食らわし、彼から離れながら、着物の前を必死で合わせる。

ときどきとびくびくで、自分の全身が震えているのが分かった。

彼もまた、こんな鳥ガラの自分をそういう目で見るのかと衝撃を覚えていたのだ。

肘鉄を食らったところで、大して効いていない顔の糸目先生は、ふうとため息をついた。

「君は、男たちの中に乗り込んで行くんだよ。みんな真正面から、正々堂々と戦ってくれるわけじゃないじゃないか」

正々堂々とししか聞こえない明快な声に、千秋は全身で納得した。

あの無法の男たちであれば、何でもやるに違いない、と。

彼は、それを千秋に教えようとしてくれているのだ。

どんな卑怯な手にも、彼女が動じないように。

「わ、分かりました、先生！ 疑って済みませんでした！」

ぎゅっと両の拳を作って、彼女はどんな仕打ちにも耐える決意を、改めてしたのだった。

「あー、いや……その……」

先生は、何故か少しバツが悪そうに何かを言いかけたが、「さあどうぞ」と、千秋がぺったんこの着物の胸を差し出す様を見て、大笑いを始めてしまう。

「せ、先生？」

いつものにこにこではなく、ゲラゲラと笑い転げる様は、彼女を
啞然とさせた。

「いやいや……悪い悪い。ちょっとふざけすぎたね……まあでも、
その意気だよ」

親指を立てて笑顔を向けられても、千秋には何のことやら分から
ない。

はあと曖昧に答えながら、彼女はそれから加わった、先生の性的
な嫌がらせにも耐えつつ修行を重ねるのだった。

「おは……よー」

『よー』のタイミングで尻を撫でられる。

真後ろに立たれるまで、近づいて来ているのに気付かずに、千秋
は何度となく尻を撫でさせてしまう。

『おは』という二言葉分の猶予があるにも関わらず、避け切れない
のは自分がどんくさいからだろうか。

こんなことでは、まだまだ男をぶつとばすことなど出来はしない。

頑張らなきゃ。

千秋は、夜な夜な修業の流れを頭の中で繰り返しながらも、疲れ
に耐えかねて、かくりと眠ってしまうのだった。

そうして何日も過ぎるに従って、彼女は糸目先生のことを心から

信じられる人だと分かった。

彼が本気になれば、彼女の貞操など紙くず同然である。

なのに、先生はまったく千秋に手を出さなかった　修行の時は別として。

言われた通りに出来なくても、彼は声を荒げたり怒ったりしない顔の構造と声のせいかもしれないが。

ただ、じっくりと粘り強く、そして時々性的な嫌がらせで千秋に悲鳴をあげさせながらも、余り深刻にならないように修業を進めてくれた。

力技の武道ではない分、人の動きや流れが大事で、とにかく糸目先生と向かい合った。

先生が、わざと力で押してくる。

その手をひねり、一回転させて倒すのだ。

急所の勉強もした。

手数を少なく、相手を倒す技。

千秋は、多くの男を同時に相手にしなければならなくなる。

それを見越して、最低限の力で相手を動けなくさせていくのだ。

先生は、どうしてこういうことを知っているんだろう。

それ以前に。

どうして、自分に教えてくれるんだろう。

千秋の中に、そんな疑問がふわりと浮かんで、そして消えていく。

先生のことを知りたいと思ったが、知った先に何かがあるわけでもないことにも気づいてしまったのだ。

ひどい男をぶつとばせたところで、千秋がそのまま村に残り続けられるわけもない。

村を出たところで、彼女に行く宛てがあるわけでもない。

ぶつとばした後、男たちに殺されるか、村を出てのたれ死ぬか。

結局、最後はそんなものだろう。

そんな千秋の沈む考えは、長くは続けられない。

いつの間にか背後に回った先生に、「隙だらけだね」と、太ももを撫で上げられていたからだ。

「ひゃー！」

どうして、情けない悲鳴が反射的に出てしまっただろうか。

千の秋 4

糸目先生が、箆^{たんす}笥を漁っている。

夕餉を終えた時間、囲炉裏で燃える炎だけで探し物は大変そうだ。

手伝おうかと千秋が立ち上がりかけた時、「あつたあつた」と、先生は何かを引っ張り出した。

「はい」

差し出されたのは、赤地に白い花の描かれた着物。

晴れ着ほどの美麗さではないが、普段使いにしては良い物だと分かる。

「え？」

差し出された女物のそれを、反射的に受け取ってしまいながらも千秋は意味が分からずに先生を見上げる。

「あげる。ちょっと大きいかもしれないけど、おはしよりで調整出来るよね」

にこにここと、あっけらかんと。

ただ「あげる」ために出した以外の何の思惑もなさそうな、幸福が絵になったような笑顔。

菩薩のようだと思ったこともあるが、千秋はここ数日は少し考えを改め始めていた。

彼は、人である、と。

悩みや苦しみが無いなんて、人にはありえない。

いまはこんな風に、笑顔を浮かべている彼であったとしても、過去もまたそうだったわけではないのだ。

事実、こうして筆筭から女物の着物が出てくる。

ここに、女性がいたということの証拠。

先生は、年齢が分かりにくい顔をしているが、十代なんてありえない。おそらく二十代後半くらいではないだろうか。下手したら三十代。

女性と暮らしていたとしても、何らおかしくはなかった。

その女性が、いまはどうなったかは分からないが、少なくとももう彼の元にはいないのだ。

「こない物……もらえません」

先生の悲しい部分に触れた気がして、千秋はついそれを押し返そうとした。

これを着た自分を見て、彼は昔を思い出してしまうのではないかと思ったのだ。

「討ち入りする時に着てよ。思い切り綺麗に着飾って、ぶつとばしておいで」

なのに。

先生は、愉快でしようがないという風にケラケラと笑うのだ。

千秋が、この着物で男をぶつとばしている姿を、想像しているのだろうか。

そっか。

彼女は、着物を見つめた。

そっか、死に装束にくれたんだ。

女として生まれて十六年。

一番のよかった頃と言えば、幼少の内町住まいの時だった。

商家の次男坊だった父は兄の店で働いていて、身内びいきの援助の入った給金のおかげか、それなりの暮らしが出来ていた。

その頃は、姉たちのおさがりではあるが、千秋もよい着物を着ていた気がする。

これを着て、死ぬならいいか。

最後の最後に、力を貸してくれた先生に見守られて死ぬるように

感じた。

先生の昔の女性への悲しい思いも、それと一緒に死ぬといい。

「ありがとうございます、私、頑張ります！」

ぎゅっと綺麗な着物を握りしめ、彼女は糸目先生を見上げた。

「あー……なんか、また変な事考えてるでしょ」

そんな千秋に、彼は苦笑いを浮かべていた。

「あの着物、着ないの？」

相変わらず、着たきりスズメのボロ着物で鍛錬に励む彼女に、糸目先生が問いかける。

「はい、あれは一張羅ですから。大事な最後に着ま……うっひゃ！」

返事が終わる前に撫でられる尻に飛びあがりながらも、千秋はその手を掴んで一回転させていた。

ほとんど体重を感じないほど、とすと彼は落ちる。

わざと技をかけられたのだと分かるほど、それは静かだった。

さすがです、先生。

性的な嫌がらせから技の終わりまで、きつと頭の中で台本が出来上がっているのではないかと思えるほど、素晴らしい流れだった。

逆に、その台本のために、まったく鳥ガラな身体を触らなければならない先生が、かわいそうに思えるほどである。

ご愁傷様、と言うべきか。

もらった着物は、確かに彼の言うように少し大きかった。

おそらく、千秋よりも肉づきのいい女性のものだったに違いない。

さぞや先生は、彼女の身体に触った時に、悲しい気分を味わっているだろうと思えたのである。

だが、これでも少しは肉がついてきたのだ。

ここの食事は、主に山菜や先生が捕まえてきた鳥や獣の肉。

外村にいた時とは比べ物にならないほど、おなかいっぱい食べられていた。

家族のことを考えると、後ろめたく思うほど。

死んだ気になって戦う修行に明け暮れるはずの千秋だったが、ここは余りに居心地が良すぎる。

死と等価交換したのならば、ここは修羅の道でなければならなか

ったはずなのに、先生は明るくて優しいし、食事もおいしい。

足りないものなんて、何も気にならないほど、ここは幸せだった。弱い心が、彼女の足を引っ張っている。

この先にある、いつか必ず来る修羅の道を避けたいと思うんだ。

それは、この幸せな時間が産みだした弊害でもある。

だが、千秋は行かなければならない。

父のため家族のため、犠牲になった姉たちのため、自分も身を捧げるつもりだったのだから。

そして。

「うんうん、そろそろ及第点かな」

地面に転がったまま、先生がにこにこして言った。

転がした千秋は、それを少し茫然としながら聞いていたのだ。

ついに、その時が来た、と。

千の秋 5

夕方の冷たい山川の水で、身を清める。

泥や埃と共に、俗世の全てを洗い流すように。

食生活の改善のおかげで、少しだけふくらんだように思える胸を、千秋は皮肉に見下ろした。

綺麗になった身体を、糸目先生にもらった着物で包む。

髪を結いあげ、山の赤い実のついた枝をかんざしにして差して止める。

新しい草鞋は、自分で作ったもの。

長い枯れ草を、よってこしらえている時、心は静かだった。

怒りとか憎しみとか、確かにあったはずなのだ。

薄れてなくなったわけではない。

だが、それは違うものに姿を変えて、自分の心の奥底に座っている気がする。

草鞋をはいて、千秋は小屋へと戻った。

ちょうど夕餉の仕度をしていた先生が、「おかえ…」と言いかけて言葉を止める。

いつも小汚い姿ばかり見せていたので、きっと驚いたのだろう。

馬子にも衣装と言うところか。

「……」

静かな静かな夕食になった。

だが、寂しい夕食じゃない。

千秋は、目の前に座る先生の顔を時々見ながら、笑みを向けられると、自然に笑みで返していた。

まるで。

この一瞬だけは、何十年も連れ添った夫婦のよう。

糸目先生は、そんなことを言われても困るだろうが、彼女にとってはそれがたとえ疑似的なものであったとしても、必要なものと思えたのだ。

あるはずだった、誰かとの未来。

それを、ささやかに千秋は体験することが出来たのだから。

食事と片付けが終わって、改めて彼女は囲炉裏の前で先生に向き直った。

きちんと正座をし、そして両の指先を板張りの床につく。

「これまで、どうもありがとうございました。命を救って頂いたこと、教えていただいたこと……感謝は言葉に尽くせません」

いまこうして、静かな気持ちでいられるのもまた、先生のおかげだ。

彼は、憎しみの戦いは教えなかった。

いつも冗談混じりの性的ないやがらせをしながら、千秋の肩を抜いてくれた。

おかげで、短い間だったが、生き延びたことを後悔せずに済んだ。

無為に槍に飛び込んで死ぬような、後ろ向きな死ではなく、自分のまっすぐな心のまま正々堂々とぶつかっていく、前向きな死の道を選ぶことが出来た。

全て、この炭焼きの男のおかげである。

彼が何者であろうとも、この感謝の心は変わりはない。

「……」

真剣な気持ちが、伝わったのだろうか。

頭を下げているので表情は分からないが、先生は何も言わないでいてくれる。

「私に何か出来ることがあれば、恩返しがしたいのですが……」

とくんと、自分の胸が跳ねる。

心のどこかで、奇妙な覚悟があった。

ここでもし、彼が自分を女として求めるようなことがあれば、それを受け入れようと。

いや。

心のどこかで、それを願っていたのだ。

この人になれば、最初で最後の女の身の自分を、捧げても構わないのではないかと。

静かな静かな時間が流れる。

パチと囲炉裏の炭がはぜ、小屋の外をわずかな風が吹き抜け、戸をカタカタと揺らす音が、とても大きく聞こえるほど。

「存分に……ぶつとばしておいで。それが、僕の願いでもあるよ」

糸目先生は、最後まで素晴らしい人だった。

俗っぽい女の身よりも、彼女がやろうとしていることの応援をしてくれるのだ。

分かっていたことだった。

千秋は、ゆっくりと顔を上げて彼を見た。

糸目でよく表情が分からないながらに、やさしく微笑んでくれている気がする。

「はい、ぶつとばしてきます」

さようなら、先生。

さようなら。

千秋は、夜も明ける前に起き出して、最後にもう一度布団に横たわる糸目先生に深く三つ指をつくと、そつと小屋を出たのだった。

千の秋 6

千秋は、家には寄らなかった。

これからやることが、自分の家に迷惑をかけることになるのは分かっていたからだ。

こんな綺麗な姿を知る者は、村にはほとんどなく、彼女は遠巻きな村人たちの視線を感じながら、村長むらおさとは口が裂けても呼びたくない男のいる屋敷へと足を踏み入れたのだった。

この辺では見ない、きちんとした身なりの女に、屋敷の男たちは多少引き気味に見ている。

正式な客人だと、勘違いしているのかもしれない。

「長さんに、お話があるのですが」

これほどすんなりと入れるとは思っていなかった千秋は、またも先生に感謝することになる。

たかが着物一枚。

たったそれだけの違いで、自分に対する扱いが何もかも違うからだ。

どんな風に、彼女の言葉が奥へと伝えられたのかは分からない。

だが、『綺麗な着物を着た、若い女が訪ねてきた』という事実だ

けでも、あの男は食いつくだろう。

でなければ、女を差し出せば税を減免するという、馬鹿げたことを言うはずなどないのだから。

そんな彼女の予想は、幸いなことにその通りだったようだ。

通された座敷では、脇息にもたれ女を横抱きにした、ヒキガエルみたいに太って醜い男が待っていた。

しゃんと立つ、千秋を上から下まで眺めた後、いやらしい舌なめずりをしている。

同時に、千秋も見ただの。

男に抱かれている女が、青ざめていくのを。

彼女には、分かったのだろう。

自分が、誰であるか。

何しろ、そこにいた女は 子どもの頃からずっと一緒に暮らしてきた千秋の姉だったのだから。

大丈夫よ、お姉ちゃん。

いまの姿を、千秋に見られなくなかったのと、どうしてこんなところに来たのかと、理解出来ずに混乱しているのが分かる。

いまの姉は、憐れまれることも望んでいない。

それどころか、女として屈辱の生活を送りながらも、死ねないでいる自分を憎んでいるようにも見えた。

死ねなかったのは、千秋も一緒だ。

ただ、彼女は運がよかった。

糸目先生と出会え、幸せな記憶が積み重なったのだから。

こんな幸福な娘は、きっとこの村では自分だけだろう。

「別嬪さんが、何の用かな？ いや、用などなくてもいいのだがね」

姉を押しつけるように、男はこちらへと身を乗り出す。

田の畔で、ゲコゲコ鳴いている方がお似合いだろうに、この男は人の言葉をしゃべるのだ。

待ちきれないのか、すぐに立ち上がり、ニヤニヤ笑いながら千秋へと近づいてくる。

千秋は、ぺこりと頭を下げた。

「ぶつとばしに来ました」

先生のような糸目になることは、彼女には難しいだろう。

それでも、精一杯の恩返しを込めて、千秋は目を細めて笑みを浮かべたのだ。

「え？」

男の驚く顔を間近でみながら。

千秋は、男の喉仏めがけて拳を、ぶちかましたのだった。

完全に虚を突かれてモロにくらった男は、ぐらぐらする頭の揺れと急所の攻撃に耐えきれないように、どすんと大きな音を立てて昏倒する。

一瞬だけ。

その場には、静寂が広がった。

姉と、目が合う。

にこっと、微笑んで見せた。

「ちあ……」

姉が、自分の名を呼びかけた時。

「何だてめええ！」

控えていた男たちが、その場に飛び込んで来た。

振り出された拳を掴んで投げる。

先生に比べたら、何て遅くみつともない動きなのだろうか。

思わず、千秋がおかしくなるほど、彼らは美しくはなかった。

ああ、先生。

ころころと男たちを転がしながら、山にいる彼のことを思った。

千秋は、やりました。ぶっとばしましたよ。

ふふふ、あははと笑いがこぼれる。

心の底から、爽快な気分だった。

山の空気の中にいるように、すがすがしい呼吸が身体の中で繰り返されている。

だが、それは長くは続かない。

転がされた男が、彼女の足を掴んだ。

その男の足を踏んで逃れようとしたが、もう片方から別の男にはがいじめられる。

多勢に無勢。

ついに千秋は、完全に動きを封じられてしまった。

なのに、彼女は自分がにこにこしていることに気づいた。

まるで、先生が心の中にいるかのようだ。

「このアマ！」

首がもげるかと思うほど強く、ひっぱたかれる。

髪を掴まれ、せつかく木の枝で作ったかんざしが、床に落ちていくのが見えた。

大丈夫。

痛いけれど、怖くはない。

もらった着物が、乱暴に引っ張られる。

多くの雑音が、自分の周囲で繰り広げられているが、もう何も耳に入っていないかった。

あらわになった自分の片方の胸のことなど、もうどうでもよかった。

あと必要なのは。

最後のひと跳びだけ。

千秋は 舌に歯をかけようとした。

千秋 7

「あ、それはダメだから」

とぼけた声が、千秋の意識を現実へと突然引き戻した。

言葉とほぼ同じタイミングで口に手がつっ込まれ、舌を噛むのを止められてしまう。

あれ？

物凄い喧噪の中で、千秋の耳によく知った人の声が聞こえた気がしたのだ。

「そんなことは、僕は教えてないでしょ？」

幻聴かと思ったのに、もう一度はつきりと聞こえて来て、千秋は目をぱちくりと見開いた。

乱れた着物の自分の上に、のしかかっている男は 糸目だった。

千秋の口に手をつっ込んだまま、もう片方の手や足で、近づいてくる他の男たちを、子どもでもあしらうように跳ね飛ばしている。

「ふえ、ふえんふえー（せ、せんせー）」

これは、夢なのだろうか。

いや、もしや既に千秋は舌を噛みちぎっていて、死んでしまっ

いるのかもしれない。

だから、菩薩が先生の姿を借りて、自分を迎えに来たのかも。

「よしよし、よくぶつとばしたね。そのまま、少し待ってなさい」

ようやく口から手を抜いて、彼は千秋の上からどいてくれた。

「てめえ、どこから来やがった！」

刃物や槍まで持ち出してきた男たちに囲まれて、先生はにこにこ
と笑っている。

「あ、それいいね」

男たちの輪など、まったく興味もなさそうに、彼は足を踏み出す
と、自分に向けられていた槍を、何ともあっけなく奪ったのだ。

その次の瞬間。

床に転がっていた千秋は 見た。

いや、見えなかった。

目にも止まらないほどの速さで、先生が槍を一闪振りまわしたの
だ。

いくつもの男の身体が、まるで物干し竿の洗濯物よろしく吹き飛
んで行く。

先生は、武道の心得があるのだと、千秋はずっと思っていた。

だが、そうではないと分かった。

彼は、槍だろうが刃物だろうが、どんな武器も筆より簡単に扱うのだと。

投げられる小刀を掴んで簡単に投げ返し、男たちの身体に的確に突き立てていく。

的確に。

それは、眉間であつたり、喉元であつたり。

要するに。

確実に、人の死ぬ部位を狙っているのだ。

先生は、千秋に人のぶつとばし方は教えた。

急所も教えたが、刃物の使い方は教えなかった。

ぶつとばすことは教えても、人の殺し方を教えなかった男は、容赦なくその手を汚していく。

ばたばたと倒れる男たちと、笑顔の殺戮者に脅え、逃げ出す男たち。

生きて残っているのは、先生と自分と姉と　泡を吹いて倒れたままのヒキガエルだけとなった。

「いい、ぶつとばしだったよ」

槍を放り出し、へたりこんだままの千秋の前に、先生が膝を折って覗き込む。

ついさっきまで、笑みのまま簡単に人の命を奪って行つた男。

だが。

屍累々な残虐な空間の中でも、千秋にとって何も変わらない糸目先生に見えたのだ。

「何で……来たんですか？」

また、助けられてしまった。

気持ちよく、死ねる瞬間があつた。

先生を思い出しながら、先生にもらつた着物で、この世を憐むでもなく充足して死ぬことが出来る時間が、すぐそこにあつたのだ。

なのに、それを邪魔した目の前の男は、少し猫背になりながら顔を突き出してこう言つた。

「そうだねえ……気持ちよく死なせなくなつたからかなあ」

まるで、千秋の心を読んだかのような言葉だつた。

んーっと座つたまま、大きく伸びをした糸目先生は、姉に気づい

たようで視線を向ける。

「しばらく新しい長は来ないだろうから、家に帰るといいよ」

千秋の姉だとは知らない彼は、優しくそう言った。

彼女はおどおどしながら、まだ生きているヒキガエルを見る。

「ああ、そうだね」

糸目先生は立ち上がって、男の方へと歩み寄った。

「とりあえず、ここはつぶしとこうか」

ひょいと持ち上げた足。

ズダーン！

その気軽さとは裏腹の大きな衝撃が、部屋を揺らした。

先生の足は、ヒキガエルの股間に炸裂していて。

千秋も姉も、そのすさまじい光景に、あんどりと口を開け放ってしまった。

「さて」

その口を閉じきるより前に、糸目先生がこっちを向いた。

「僕はきつとお尋ね者になっちゃうから逃げるけど……君はどうす

る？」

ふわふわと軽い言葉。

お尋ね者になるということは、不幸の始まりのように感じるのに、彼にとってはそうではないようだ。

旅に出るくらいの気楽さだ。

彼がお尋ね者になるというのなら、原因をつくった千秋だって同じこと。

死に損なったのだから、生きる方法を探さなければならない。

生き残った先にあるのは、野垂れ死に。

そう考えていた千秋の目の前に 糸目先生がいる。

「わっ……私も一緒に逃げて……いいんですか？」

誘ってくれているような、気がした。

その一縷の望みに、彼女は反射的に手を伸ばす。

先生は。

そこらの男の下敷きになっていた千秋の髪を止めていた木の枝のかんざしを拾い上げ、ぼろぼろの彼女の髪に差してくれた。

「じゃあ、一緒に逃げようか」

にこり。

「はい！」

差し出される大きな手を握り、千秋は立ち上がって着物の乱れを直した。

「千秋……」

姉が、何か言いたげに呼び止めた。

先生の手を握ったままの彼女は、振り返って幸せな笑みを浮かべて見せる。

逃亡者になるはずなのに、いま、自分が世界で一番幸せな人間に思えたのだ。

「みんなによろしく言つといて」

そして、千秋は村を出た。

前に出た時と違って、一人じゃなかった。

大きくてあったかくて、そして残忍な手を持つ人と一緒なのだ。

そんな人と一緒なのだから。

鬼が出たって 怖くなかった。

【千の秋編 終】

春の 1

牛蒡ごぼうを拾った。

農民らしい日に焼けた肌と、やせっぱちの身体を持つ彼女の第一印象は、そういうものだった。

出会いは、恒例の町への炭売り。

前を歩く、牛蒡みたいな女の子の尻を見ながら、春一はるいちはのらりくらりと歩いていた。

許可証なんて、持ってないんだろうなあ。

そう思いつつも、とりあえず目は尻に固定している。

肉付きが足りないと、勝手に見ている側のくせに、文句を思い浮かべていた。

案の定、彼女は門の前で門番ともめ始めた。

外村の貧農の子が、その窮状を役所に訴えようとしているのだろ
う。

それくらいは簡単に見て取れたが、途中であきらめて帰ると思っ
ていた。

もしくは、門番の下卑た要求に泣く泣く応じるか。

後味が悪いねえ。

春一は、どっちにせよ胸の悪くなる光景だと眺めていたのだ。

なのに。

突然、少女の全身が怒りに燃え上がったかのように、彼の目には映った。

あきらめるでもなく、身を渡すでもなく、少女は怒りの炎を纏ったまま、槍の先に飛び込もうとしたのだ。

ちよつとまっただああ！！！！

おかしいから！

怒ったのに、そういう行動に出るのは、違うでしょおお！！！！

もう、ほとんど反射だった。

玄人芸人の突っ込みよりも的確に素早く、春一は飛び出して彼女に手をかけていたのだ。

気が付いたら、その軽い身を引き戻しながらすっ転ばせつつ、突き出される槍の穂先をへし折っていて。

そして。

あー。

目立たず騒ぎを起こさず暮らしていた彼は、それが一瞬にして瓦解したのを知ったのだ。

やれやれ。

振り返ると、地面にへたりこんだまま、驚きで怒りも引っ込んでしまった牛蒡娘がいた。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

それが、千秋という少女の存在を認めた、一番最初の出来事だった。

『糸目先生』もしくは『先生』

それが、彼女が春一を表す時の言葉。

名前を聞かれてないので、教えていなかった。そのせいか、いつの間にかそんな呼び名で定着してしまったのだ。

主に『先生』と呼ぶのだが、あんまりエッチな嫌がらせが過ぎると、まれに『糸目先生！』と呼ぶ。

そんな少女と、春一は一緒に逃亡の旅をしている。

内町に入ることせず、時折通りかかる外村で、農作業の手伝い

などをしながら食いつなぎつつ進んでいた。

農作業の手伝いをするのは仕事に慣れている千秋で、春一はというと、農民の歪んだ身体を整体などで整えてやる方が性に合っていた。

農民の身体は、朝から晩までいじめ抜かれていて、面白いほどにぱきぱきと音を立てる。

腰痛に苦しむ者も多かった。

千秋は働き者で、ちょうど収穫期の今は重宝されている。

しばらく住み込みで頼むと言われ、納屋まで借りることが出来た。

この村長はまだマシなのか、彼女のいた村ほどひどくはない。

よそから来た二人を食べさせるくらいは、何とかなっているようだ。

「先生、上掛け借りてきました」

古い綿入れの着物をひとつ、千秋が抱えてくる。

にこにこ明るい笑顔で差し出すそれを、春一はじっと見た後に、彼女の顔へと視線を動かした。

「上掛けは、ひとつだね」

「はい！ え？ あー！ わ、私はわらをかぶりますから大丈夫で

す！」

元気よく答えてから、ようやく春一の笑顔の突っ込みに気づいたようで、千秋はわたたと彼に上掛けを押し付ける。

「いや、それじゃ僕がひどい男になるんじゃないかな？」

一人だけ上掛けを使う男の図は、随分ひどい構図に見えるではないか。

「いえ、先生がひどい人じゃないのは、私、ちゃんと知ってますから、大丈夫です！」

必死にフォローする顔は可愛いが、どうも彼女は春一の思考と違う方向へとすっ飛んで行くきらいがある。

炭焼小屋で、修業している頃からそうだった。

一度捨てた命を、有効活用するのかと思いきや、彼女はいかにして『前向きに死ぬ』かと考えていたのだ。

そんなものは、国のために命を捨てる軍人に求められる精神であって、一般農民の娘である彼女が極めるべき道ではない。

なのに、千秋はその道を全速力で走っていったのだ。

出会いの槍への突進からして、彼女は随分思いつめていたのだろう。

16歳にして人生に絶望させるような国は、無駄に広い国土のせ

いでもある。

地方の町にまで中央の執政がきちんと届かず、それぞれの地域の町の長に預けるような形となっている。

そのため、地域によってひどい格差が生じることとなるのだ。

彼女が暮らしていた外村のように。

ただでさえ、無法者から守られにくい壁のない場所だ。

特に、いま外の農地にいる者のほとんどが、内町の出身であり、守られることに慣れていた者たちである。

何世代にも渡って住み続ければ、心も身体も頑丈になっていくだろうが、第一世代にはつらからう。

そういう意味では。

千秋は、第二世代になるはずだった娘だ。

ひどい理由で村にいられなくなったが、そんな時代を経験しているせいか、痛いとか辛いとか口に出すのは悪いことだと思っているように見える。

更に、春一を「すごい先生」か何かだと勘違いしていた。

だから彼女は、彼に良い環境を準備しようと、がんばってしまうのだ。

そんなに、いい奴じゃあないんだけどねえ。

きらきらの、尊敬の眼差しがこちらに向けられる度に、春一はさ
さやかな良心が痛む時がある。

「まあ、とりあえず……一緒に寝ようか？」

渡された綿入れを広げて、千秋においでおいでと呼びかける。

「わー！ と、とんでもないです！」

彼女は、面白いくらいに大きくぴょんと飛びのくと、真っ赤にな
って逃げてしまう。

あー。

惜しいことをしたなあと、春一は苦笑した。

やっぱ、あの時、おいしくいただいとけばよかったかな、と。

春の一 2

『あの時』

千秋の覚悟は、分かりやすく春一に透けて見えていた。

もし、彼が望むのならば、千秋はその身を自分に差し出しただろう。

その申し出は、魅力的でなかったわけではない。

彼女は、人にはない美しさがある。

決して美人とは呼べないが、覚悟を決めてきりと前を向いた時は、目を引かずにはいられない独特の雰囲気醸し出す。

春一は、自分があげた着物でそれを思い知った。

いや。

その着物よりも、もっと前。

門の前で怒りを纏った後姿は、まさに圧巻だった。

春一でさえ、目を離せなかったほどのあの一瞬は、誰も彼女が農民の娘だなんて思いもしなかっただろう。

もっと気高い、違う領域に足を踏み込んだ者のそれに見えたのだ。

だから。

後味が悪くても、首を突っ込もうなんて思ってもいなかった春一が、反射的に手を出してしまったのである。

そう、彼女はとても魅力的なのだ。

なのに、千秋は胸や尻に触られることを許しながらも、こちらに詫びめいた視線を送ることがあった。

貧相な身体は、触られるに値しないとでも思っているかのように。

おかしなことを考えるなあ。

自分が触りたくないなら、春一は触らない。

触りたいと思うから触るのだ。

時折彼女の見せる、彼の見たことのない魂の燃える瞬間。

それが、本当にこの細い千秋の中に入っているのか、不思議だったのだと思う。

胸に触れば、彼女のとびきり元気な鼓動が手のひらに伝わる。

尻に触れば、もうちょっと肉をつけないと子供を産むのが大変そうだと余計なことを思う。

個人的な趣味と実益を兼ねた、理屈をつけたとしても男としては最低の行為だろう。

そんな最低な行為でも、彼の胸は痛んだりはない。

いいだろ？　僕が助けたんだし。

千秋が聞いたなら卒倒するようなことを、春一は普通に考えていた。命を助けたから、その命が全部自分のものだとはまでは言わないが、近いことは思っていたのだ。

その身を助けるのに、彼もまた犠牲は払ったのである。

町に出入りする許可証が、事実上無効になったことそのものには、さしたる犠牲だとは思っていなかったが。

いかようにも使える千秋の命を、春一は自分の目を信じて育てることにした。

そのためには、まず彼女をしがらみから解放する必要があった。

あの全身から噴き出す怒りを、少し勿体ないが昇華させようと考えたのだ。

春一がやれば、ほんのわずかな時間で出来ることを、彼女自身の力で成し遂げさせることにする。

希望が達成されれば、きっと彼女は自由になるだろう。

それは、村にも帰れない形の自由だったが。

だが、春一にとっては好都合な話だ。

そうすれば、彼はその手を握って、千秋を堂々と連れ出せるのだから。

彼女も、きっと拒みはしないだろう。

ただひとつ。

心配はあった。

村長の屋敷で、彼女を助けに入る時、そこで見せる自分の姿に怯えられる可能性があったのだ。

春一の手は、いまでこそおとなしいものだが、綺麗なものではない。

炭よりも、もっと赤黒いもので汚れた時期もあった。

彼女をその道に落とすことは考えられず、しかし、千秋を羽交い絞めにして殴り飛ばし、女としてズタズタにしようとした男たちに容赦をしてやる気にもなれず、春一は本性の一部を表したのだ。

そんな彼を見て。

千秋は 怯えてはいなかった。

驚いてはいたが、その瞳には何の恐れもなく、それどころからこれまで通りの『糸目先生』を見る目だったのだ。

大した胆力だよ。

それには、春一の方が驚くほど。

だから、彼は千秋の手を握って村を出た。

宿無しの生活が始まって、彼女は毎日楽しそうにしている。

笑顔の朝を迎える度に、情愛も増していくのは、おかしい話ではない。

彼女は、深い女性になる素質があった。

その片鱗は、これまで見た姿の中に見えていたのだから。

じっくり育てて、おいしくいただきたいものだね。

困ったことに、春一は『純粹』に、本気でそんなことを考えていた。

早く、自分が食べたくたしょうがなくなるほど、素晴らしい女に育てばいい。

そのためには。

「風邪をひいている暇はないよね？」

「あ……せ、先生……」

身を固くして春一を拒む彼女の身体を、自分の綿入れの中に引っ

張り込んだのだった。

春の一 3

「先生！ 大変だ！」

地面にひいたむしろの上で、農民の身体をばきばきいわせていた春一の元に、若い男が駆け込んでくる。

千秋が『先生、先生』と連呼するものだから、村人まで同じように呼ぶようになってしまった。

全体の医者か何かだと、思われているに違いない。

「ち、千秋ちゃんが、長んとこの用心棒たちと揉めて！」

人の背中に置いた手を、春一は一度止める。

長は少々まともでも、用心棒がみなそうだとは限らない。

もともと、内町に住めないような者を雇っているわけだから、粗暴で学のない者ばかりだ。

かえって内町出身の農民の方が、よほど学があるだろう。

「見慣れないっていうんで絡まれて……男が千秋ちゃんを触ろうとして」

ああ。

話の流れ的に、オチが見えた。

春一は、背中に置いた手を再び動かし、ぱきつと言わせる。

「あだだ」

という患者の声と。

「千秋ちゃん、男を投げ飛ばしちやっただよ！」

という男の声は、ほぼ同時だった。

まあ、投げ飛ばすだろうね。

女の身体を触るのは、『春一以外』は悪い奴 千秋の身体に、

彼自身がそう仕込んだのだから。

「相手は何人だったかな？」

ぱきぱきぱき。

「えっ？ えっと……三人です」

「ただいま帰りましたー」

言葉が、立て続けに交差した。

春一は、千秋の手に負えるかどうかを判断するために人数を聞いたが、男はそんな問いに戸惑って、少し答えるのに遅れる。

そこへ、当事者である本人が滑り込んできたのだ。

ぴんぴんした様子で。

走ってきたせいか、はあはあと息こそ乱れてはいるものの、千秋は無事だし笑顔も滲刺としている。

ちょっと、髪が乱れているくらいか。

そんな彼女を、春一は満足に思いながら見上げた。

ぶつとばしたら 逃げる。

千秋に足りなかった最後のものを、春一が教えたのだ。

戦い続けるのは無駄なことなので、すみやかに逃げる。

彼がそれを体言すれば、千秋は何の疑いも持たずについてくる。

ここまでの道のりで、どうやらちゃんと身についたようだ。

放っておくと、命尽きるまで戦いそうな彼女の魂を、そうして春一は整えてきた。

「そろそろ、ここも頃合のようだね」

「はい、すみません」

整体をやめて立ち上がる彼に、千秋が照れた顔で詫びる。

うん、可愛い可愛い。

春一は、そんな彼女の様子に幸せな気分を味わえる。

この村に、長居したいわけではない。

しばらく農作業の手伝いをしていた千秋だが、ここの生活に未練がないのが、よく伝わってくる。

彼女の優先順位の一番目に、しっかり春一が座っている証拠だ。

それは、嬉しいことであり、当然なことである。

「お世話になりました！」

いともあっさりと、彼女は村人に別れを告げる。

対する人たちが、ぽかんとしてしまうほどに。

「追われると面倒だから、山に入ろうかな」

挨拶も適当に、そんなことを言いながら歩き出す春一を、小走りで彼女が追ってくる。

「本当ですか？」

横から、ひよこつと疑わしげな表情が見上げてきた。

どうやら、彼の言葉を信用していないようだ。

「よく分かったね」

ぼんぽんと、その頭に手を乗せてほめてやる。

千秋のぶつとばした男たちが、人数を集めて仕返しに来る可能性があった。

あの農民たちのところへ行き、どこへ逃げたか聞くかもしれない。

だから、春一は聞こえるように『山に入る』と言ってやったのだ。追跡をかく乱するために。

その間に、さっさと距離を稼がせてもらおう。

それが、彼の立てた逃亡計画だった。

春の 4

うまくいく逃亡計画の　はずだった。

千秋と楽しく歩く日々が戻ってきたと思っていたのに、計画違いが発生してしまったのだ。

山とは反対の北側へ向かっていた二人の後ろから、数騎の騎馬が追ってきていた。

ありやりや。

春一は、せっかく彼女にいいところを見せたつもりが失敗してしまい、少しだけ残念に思った。

同時に、近づいてくる騎馬の様子が、想像と違うことに気づく。

馬に乗っている彼らの姿は、用心棒というより、軍人のものに見えた。

兜に鎧、頭のとっぺんからひらひら揺れる緑の布。

間違いない、西方担当の軍属の者だ。

余計に悪いな。

軍人が、外村の長のところに来る理由は、いくつかある。

内町の役所からの知らせなどを届けるためや、街道の警邏や巡察

のため。

もし、自分たちと無関係な仕事であの村に来ていたとしても、こうして向かい合ってしまえば、無関係とはいえなくなる。

何故ならば、目の前まで来て馬を止めた軍人は、彼らを見てこう言ったのだ。

「糸目の男に……女」

二人は、お尋ね者だった。

相変わらず、春一は『糸目』と呼ばれるようだ。

いづどこにいても、彼について話題があがる時は、『あの糸目の奴』だった。

それはさておき、千秋の村の長をぶつとばしたことは、やはり報告されていたのだろう。

「ちょっと話を聞かせてもらおうか」

馬から、一人が威圧的に下りてくる。

ずしんと音がしそうなほど、重量級の男だ。

後ろの二人も、馬上のままではあるが、油断なく剣を抜いた。

「先生……」

千秋が、彼の袖を引いた。

彼女にとっては、初めての追跡者との遭遇だ。

多少の武術は伝授はしたが、やはりこれほどの体格差と職業軍人を相手にすることが不安なのだろうか。

そう思っていたら。

「先生……私、やってみてもいいですか？」

何と、おそろおそろではあるが、自分から前に出ようとするではないか。

うわあ。

感動と同時に、春一の胸の中に爆笑の渦が湧き上がる。

さすがだ。

さすがこの子だ、と。

小さい彼女からすれば、子供が立ち上がった熊と対峙しているようにしか見えない。

誰が見ても、『おチビちゃん、逃げて！』と叫びたくなる構図である。

軍人は、困惑の表情を浮かべた。

彼は、野生の熊ではなく人間だ。

だから、突然小さい少女が立ちはだかったことに戸惑っている。

だが、軍人は自分の職務を全うしようとした。

いきなり斬りつけるような非道な真似はしなかったが、大きな両手を出して、彼女を捕まえようとしたのである。

紳士だねえ。

それを、心地よく春一は眺めていた。

剣を出されたら、さすがに彼も手出しをしたかもしれないが、根が心優しい男なのか、あからさまに女を傷つけようとはしない。

まさに 格好の千秋の獲物。

いい、訓練台だった。

「おっ？」

男は、まるで石にけつまずいたかのような、間抜けな声をあげる。

その直後。

ドシンと、彼は地面に仰向けにひっくり返されていた。

「……………」

刹那に生まれた虚を、春一は逃しはしなかった。

騎馬の二人の馬に、拾った石を投げつけたのだ。

「うわあっ！」

驚いた馬は大きないななきと共に暴れ、前足を高く跳ね上げ、馬上の軍人を突き落とす。

ほいほいっと。

更に石を馬の尻に投げつけるや、二頭の馬はこらえきれずに散り散りに駆け出してしまった。

「この！」

千秋に投げ飛ばされた男が、牛蒡のような足を掴もうとするが、すでに彼女は春一の方へと逃げてきている。

『先生……私、やってみてもいいですか？』

そう、彼女は言ったではないか。

それは、『うまくいかなかったら、先生、よろしくお願いします』という意味。

千秋からの信頼の大きさを、春一は心から受け止め、受け入れた。

「君は、彼女に優しくかったから……手加減してあげよう」

熊のような軍人が起き上がり、顔を真つ赤にして剣を繰り出すのを、彼は遅回しの映像で見ていた。

すつと懷にもぐりこみ、剣を握った手に自分の手を添える。

そのまま。

全身を。

ね　じつた！

ズダダダアアン！！！！

受身など取らせる隙間も与えず、兜の頭から地面に叩きつける。

頭をしたたか打ち付けられ伸びた男を踏み越えて、残り二人に飛びかかる。

手加減の話をしたのは　さっきの男だけだった。

春の一 5

「初めて乗りました」

千秋は、おっかなびつくり馬にしがみついている。

残った一頭の馬を、春一がごく自然に拝借したのだ。

彼女を前に乗せ、後ろから彼が支えるように手綱を持つ。

本当に、胆力のある子だ。

黒々とした千秋の髪が、目の前で揺れる。

たとえどれほど、春一が目の前で他人の命を奪おうとも、彼女はそんなことなどどうでもいいことだと思っっているように感じるのだ。

それ以前に。

何故、自分のことを聞こうとしないのか。

どこからどう見ても、彼はカタギではない。

少なくとも、千秋が見てきた部分だけでも、十分怪しさの塊だった。

なのに、不自然なほどに聞いてこない。

かと言って、春一にまったく興味がないわけではなく、むしろ逆。

まっすぐな信頼の心は、本当に彼を心地よくさせるものの、微妙な気分も味わわせてくれる。

どこまで、彼女は自分を信頼し続けられるだろうか、と。

何が、彼女にとって裏切られたと思うことなのか、その最終線がよく分からない。

命を助けてからここまで、居心地のいい関係を作り上げてしまっただけで、彼女の目に『不信』の色が浮かぶのを見るのは嫌だな、と思ったのだ。

すっかり気に入ってしまっただけに、手放したくない気持ちだが、着実に春一の中で育っていた。

さて、どうしたものかね。

きよろきよろと珍しそうに周囲を見回す千秋を見つめながら、彼は馬を走らせる。

「高いですね……眺めがいいです、先生」

背中を預けるようにして、首だけで少し振り返る彼女の顔は近い。興奮しているのか、頬や耳が赤くなっている。

ま。

「そうかい、よかったね」

ま、いつか。

千秋は楽しそうだし、幸せそうだ。

二人をつなぐものは、俗世に転がっているものではない。

金でも財産でも、地位でも権力でもない。

ひろびろとした町の外で、たまたま出会って生まれた、信頼というものだけだ。

この世界で、そんな儚いものが生まれたこと自体、奇跡のような出来事。

いまは、それを楽しめばいいのだと、春一は思った。

色々としようがない国だが、楽しいことは彼の腕の中にあるのだから。

「今夜は、何を食べようか？」

「おいしい鳥を捕まえよう！」

こんな、たくましくも他愛ない会話さえ 春一には、幸福の塊に見えるのだった。

罪と饅頭の重さ 0

「山の物売りか……」

クワクワと鳴く野鳥の籠と、山菜がたっぷりつめこまれた籠のふたつを両側にさげた馬の手綱を持って、少女は内町へと入るための門の前に立っていた。

門番の軍人は、許可証をじっと見つめた後、彼女の顔をジロジロと眺めた。

そんな男に、少女はにこりと微笑み返す。

思わず、門番が頬を赤らめてしまうほど、清しい笑みである。

「よ、よし……入れ」

気恥ずかしさを隠すためか、男は許可証を突っ返しながら、ぶっきらぼうに少女を門の中へと促した。

ぺこりと会釈をして、彼女が足を踏み出そうとした時。

「ちょっと待て」

男は、もう一度少女を呼び止める。

首を傾げて振り返る彼女に。

「その馬は、大層いい馬のようだ……荷運びだけなら、もっとしょ

ぼくれた馬でもいいだろう。町で売れば高値がつくぞ?。」

軍人は、親切心かそんなことを教えてくれた。

「ありがとうございます、考えてみます」

彼女は、ぺこりとお辞儀をしてから、ゆっくりと町へと入っていったのだった。

罪と饅頭の重さ 1

「待たせたね」

広場にたたずんでいた千秋は、そう声をかけられた。

はっと振り返ると、そこには彼女の師匠が立っている。

医者のような頭巾をかぶっているの、何だか印象が随分と違うが、彼の声を間違えたりはしない。

灰色の頭巾は、整体師の印だ。

鍼灸師や骨接師、ないしんし内診師に薬師、産婆など、それぞれ違う色の頭巾をかぶっている。

町を歩けば、その人が何の職業であるか分かるようにしてあることで、必要な民に声をかけやすくしてあるのだ。

逆に、仕事をしたくない時の医者は、わざと頭巾をかぶらずに出かけるようだが。

そんな身分を証明する衣装を、先生はあっさりと取り去って懷にしまう。

中から出て来たのは、見事な糸目。

「先生、無事に入れたんですね」

ようやくの再会に、千秋は心底ほつとしたのだ。

実際、離れている時間は、ほんの半時ほどだったろう。

しかし、知らない町で無事再会できるかどうか分からずに、彼女はずつとときどきしていた。

もう一度、内町に入れるなんて思ってもみなかったが、それは千秋が望んだことではない。

前に拝借した馬を見て、先生が言ったのだ。

「この馬、売っぱらおうかな」

余りにいい馬過ぎて、長く持っているには目立ち過ぎるという。

それに異論はないが、一体どこで売れるのかと怪訝に思っていたら、先生はさっそく準備に取り掛かった。

得意の山で鳥を狩り、それを外村の長のところへと持っていき、売りつけて来た。

その代わりに頂いて来たのが、お金と灰色の布。

針と糸も渡されて、千秋はそれで頭巾を縫ったのだ。

正確には、余りに器用に先生が自分で縫おうとしたので、つい奪い取ってしまったという方が正しい。

彼が、何でも出来る人であることは、これまでのことでよく知っ

ている。

しかし、余りに全部をこなされてしまうと、千秋は女として立場がなくなってしまうのだ。

糸目先生がしたいことは、自分もしたいこと。

そう信じている彼女は、ちくちくと頭巾を縫い上げた。

出来上がった着物など買えない外村にいたので、古い着物を解いて、別のものをこしらえることなど、日常茶飯事だったのだ。

彼女が縫物をしている間に、先生は馬具をすべて取っ払って捨て去った。

裸馬の出来上がり、だ。

馬具には軍の印が入っているので、こんなものをつけて売れば、すぐに盗まれた馬だと分かってしまうという。

鞍の代わりに、さくさくと編みあげた竹籠を背負わせる。

ようやく千秋が頭巾を縫い上げた時には、その籠にはたつぷりの生きた野鳥と山菜が詰め込まれていたのだ。

そして、差し出されたのは 町に入るための許可証だった。

「……!?!」

さすがに、これには千秋も驚いたのだ。

外村の農民たちが、どんなに欲しいと思っても手に入らないようなものを、先生はあっさりと出してくるのだから。

茫然としている千秋に。

「本物じゃないから安心してね」

と、矛盾に満ちた説明をしてくれた。

普通なら、「本物だから安心して」というところではないのか。

だが、もしこれが本物であったとしたら、千秋はどうして彼がそれを持っているのか疑問でいっぱいになったはずだ。

確かに、先生は以前の町に入るための許可証は持っていた。

だが、許可証は町ごとに決まっていて、どこの町でも通用するよ
うなものを持っているのは偉い人くらいだ。

あっさり偽造された証書を差し出すところを見ると、前の町の許可証も本物ではなかったのかもしれない。

「分かりました」

千秋は、笑顔でそれを受け取ることにした。

先生に抜かりがあるはずがない。

門で疑われて捕まるような許可証を、彼が用意するはずがないの

だ。

千秋は、山の物売りとして、馬を引いて町に入る。

先生は、後から別の許可証で入ってくるという。

灰色の頭巾は、そのためのもの。

「門の中に入って、まっすぐ道を行くと広場に出るから、そこで待っててね」

先生の教えを、大事な言葉として千秋はごくんと飲み込んだ。

別行動になるのだから、この言葉にちゃんと従わないと会えなくなってしまう。

幼い頃の記憶だが、彼女は内町のことを知っていたので、その広さを十分に身体で覚えていた。

すっかり迷子になろうものならば、ひどいことになる。

地理の明るさからおそらく、先生はこの町に入ったことがあるのだろう。

許可証を偽造出来るということは、ある意味、どこの町にも入り放題ということだ。

これまで、いろんな町を見て来たに違いない。

偽造というちっばけな悪など、千秋の目にはどうでもいいことと

して映っていた。

彼女の前で、先生が人を殺した数にも関心はない。

糸目先生は『卑劣な悪』は、しなかった。

弱い人を傷めつけたり、何かを奪おうなんて、思ってもいない。

この世の『法』は、弱い者を守るものではないのだと、千秋は本能的に気づきかけていた。

だからこそ弱い者は、法を大事にするよりも、己の良心に従ってたくましく生きるしかないのだ。

たくましい部分を、千秋は糸目先生を通じて学んでいる最中。

彼は弱い人間ではないが、強い側にいることに興味がないように見えた。

それもまた、千秋が先生を信じられる理由のひとつ。

「さて、荷を売り払いに行こうか」

馬の手綱を、彼女から受け取りながら、先生は笑う。

この町に入ったのは、ただの手段であって目的ではない。

「はい！」

全部売って身軽になったら、また一人で自由な外に出るのだ。

彼女は、軽い足取りで先生の後について歩き始めたのだった。

罪と饅頭の重さ 2

あっさりと、荷は片づけられた。

馬まで、綺麗さっぱりと。

鳥を卸し、山菜を卸し、馬屋で馬を売りさばく手順を、千秋はちゃんと覚えていようと思ったのだ。

だが、あまりに手際よく交渉を成立させるので、ぽかんとしている間に終わってしまった。

特に、馬はいい値がしたらしく、先生の巾着はずっしりと膨らんでいる。

「さて、買物でもしよう」

先生はそう言って、千秋の手を引いて商店通りへと進んで行く。

これまでの裏通りと違い、そこは町の華やかさの象徴だった。

明るい色の着物が飾られ、その前にはおしゃれな女の子たちが張り付いてきやあきやあと声をあげている。

茶屋に座る伊達男は、若い女に色目を使っていた。

余りに色鮮やかで明るい光景に、一瞬千秋は先生のように目を細める。

眩しすぎて、直視できなかったのだ。

子どもの頃に見た景色と、この年になって見た景色は、10年ほどの差こそあれ、余り変わらないもののはずなのに、ぴかぴかと輝いて見えた。

次の瞬間には、自分のうす汚れた姿が、少しばかり恥ずかしくなる。

着物は先生にもらった赤いものだが、ここまで着たきりだったせいで、随分とくたびれてしまっていた。

初めて袖を通した時は上質だと感じたはずなのに、いまではすっかり古着にまで貶めたように感じたのだ。

商店通りを歩く女の子たちを見ていたら、随分場違いなところに来てしまったのだと思い知らされる。

千秋は、無意識に先生の影に隠れてしまった。

「……」

人目から隠れはしたが、先生から隠れた訳ではないので、肩越しに見られてしまう。

彼は、小さくなっている千秋の頭に軽く手を置いた後、歩き始める。

先生がのれんをくぐったのは、古着屋の店だった。

日常着から、古い花嫁衣装まで並んでいるような雑多な品ぞろえのそこは、二人が入るには相応しいように思える。

いかにも、外の人間が物売りに来て、その金で何か衣装を見繕っていくという、ささやかな贅沢の場所に感じたのだ。

勿論、内町の人間でも、慎ましやかな生活をしている者も多い。

積み上げられた着物を、とつかえひつかえひつくり返している女性たちが、目の端に映る。

「好きなものを選んでおいで」

そんな女性たちの中に、千秋は軽く押し出された。

着替えの一枚もないと、洗濯にも困る有様なのだから、当然考えられる提案だったし、彼女もそうじゃないかなとは思っていたのだ。

だが、いざ着物を選べと言われると、金額や図柄など考えることが多すぎて、とても頭が働かない。

思えば、千秋は自分で着物を選んだ記憶がなかった。

ずっと、姉たちのおさがりを着ていたからだ。

それでも勇気を出して、着物を吟味している女性たちの中に踏み込む。

おそろおそろ、布地に触れて持ち上げてみる。

「ちょっと、あんた臭いよ」

隣のおばさんが、こっちを見て顔を顰めた。

しばらく放浪をつづけたために、千秋はすっかり野の臭いがしみついてしまっているようだ。

秋も深まっていて、水浴びをするには寒い時期に入ってしまったため、身を清めることもままならない。

私、臭いんだ。

千秋は、大きなショックに見舞われていた。

外での生活は、とにかく生きるのに一生懸命で、体臭のことなど気にしている余裕もない。

こつもはつきりと言われると、突然自分が汚物の塊のように思えてきた。

「着物を買う金があるんなら、湯屋にいつてきな。商店通りより、ひとつ辻向こつにあるからね」

しょぼんとなった千秋に、おばさんはバツが悪そうに言葉を付け足した。

「それに、これから寒くなるんだから生地が厚いのを選ばなきゃ。こついうのとか、こついうの。何枚も買えないんだろ？」

ぐいぐいと着物の群れの中から、めばしいものを引っ張り出す手

さばきは、大したものだ。

どこに何があるか、既に頭に入っているかのように思える。

この店の、かなりの常連なのだろう。

「ほら、この山吹の色のなんか、値段の割に上物だよ。若い子が着ても、おかしくないだろう？」

オバさんの迫力におされ、千秋はコクコクと頷きながら受け取るので精いっぱいだ。

内町の人たちの多くは、明るい性質をしている。

日々の生活が、それぞれの階級で安定していて、外敵に襲われる心配が低いせいだろう。

「あ、ありがとうございます」

勧められた山吹色の着物を抱え、先生に相談に戻る前に千秋は、おばさんにお礼を言った。

誰も知り合いのいない町で、初めて顔を覚えた人だ。

「ちゃんと湯屋にいきなよ」

照れ笑いをしながら、おばさんは千秋の背中を痛いくらいに叩いた。

その勢いに押されながら、糸目先生の元へと戻る。

「これ、どうですか？」

おそろおそろ、彼の前に着物を広げて見せる。

どんな表情をしているか見たくて、千秋は着物の横からひよいと顔を出した。

「いい物だね。よし、これにしようか」

先生は、生地と金額を確認して、満足そうに彼女から着物を受け取る。

その顔を見て、千秋は自分がにこりとするのを感じた。

彼も、男物の着物を一枚握っている。

二枚の着物の支払いを済ませ、店を出ようとしたら、さっきのおばさんが飛んで来て言った。

「お兄ちゃん、ちゃんと妹さんを湯屋に連れていくんだよ！」

わあ。

千秋は、斜め下を向く。

ふたつの理由が、千秋を恥ずかしさの混じる微妙な気持ちにさせたのだ。

兄妹に見られたこと、しつこく湯屋を先生に直接勧められたこと。

人から自分たちがどう見られるかが聞こえてくると、落ち着かない気分になる。

前の外村では、『先生と弟子』だった。これは、千秋が彼のことを『先生』と連呼していたせいだろう。

そして、このおばさんの目には『兄妹』だ。

千秋には 色気がない。

だから、色気のある関係には見られない。

先生もまた、彼女にそんなものは期待していないだろうし、そういう目で見ていないのは、過去の出来事が全て証明してくれている。

「はいはい、湯屋ですね……聞こえてましたよ」

軽く請け合う先生の言葉の、最後がまたいけない。

わざわざ言われるまでもなく、とつくに話は聞こえていたと、あっさり認めているのだ。

ということとは。

臭いというくだりも聞かれていたのだろう。

それ以前に。

これだけ一緒に旅をしているのだから、気づいていないはずはな

いのだ。

がっかり。

せっかく新しい着物を手に入れたというのに、千秋はすっかり肩を落としてしまったのだった。

罪と饅頭の重さ 3

「湯屋には、行ったことはあるかい？」

道すがら先生に問われて、千秋はむかしむかしをちよつとだけ思い出した。

いつも、伯父の家にお風呂を借りに行っていたことを。

その都合の悪い時だけ、湯屋に行くことになるが、そんなことは本当に滅多になく。

一度か二度の記憶しか、よみがえってこない。

音の反響する湿気に包まれた世界。

大きな湯船にはしゃいだことが、うつすら思い出される。

千秋の沈黙を、何と取ったのだろうか。

先生は、説明を始めた。

「入ると番台があるから、そこにお金を払って『女』と書いてある方に行くんだよ……そしたら脱衣所があるので、空いてるかごに……」

あがったら、湯屋の前で待ち合わせよう。

言われたことに、こくこくと頷いてついていく。

大きな煙突に向かつて、歩いていることに気づく。

あれが湯屋なのだろう。

予想通りの場所にたどり着き、のれんをくぐると目の前に番台がある。

老婆が一人座っていた。

一度に二人分、払えそうな作りなのに、先生はわざわざ千秋に小銭を渡す。

そして、どうぞと自分の前に行かせようとするのだ。

これもまた、勉強なのだと感じた。

何でも、一人で出来るようになる訓練のひとつ。

千秋は手の中の小銭を、番台の小皿に入れる。

「まいど」

無愛想な老婆は、顎で右ののれんを指す。

『女』と、紺地に大きく白で抜かれた文字の長のれんがさがっている。

ちらりと振り返ると、先生が軽く頷いた。

一人の心細さを、自分の手でぎゅっと握って、千秋はいざ女風呂

へと足を踏み込んだのだった。

意外と簡単だった。

千秋は、綺麗に髪と身を洗って、湯船に沈み込んだ。

長い間忘れていた、温かい湯に包まれる感覚が、固い自分の身をほぐしていくように思える。

意識が、だんだんとろんとしていく。

外の生活は辛くはないが、身体には疲労が蓄積していたようだ。

そんな正直な身体の悲鳴に逆らえないまま、彼女はゆっくりとお湯を堪能したのだった。

さすがにそろそろ出なければ、先生を待たせ過ぎてしまうのではないか。

とろける意識と、湯への後ろ髪引かれる葛藤を乗り越え、彼女はようやく脱衣所へと戻った。

問題は、その時に発覚した。

「あれ？」

千秋は、脱衣所のかこの前で首を傾げる。

ああ、ここじゃなかったっけ。

沢山簞の並ぶ棚があるので、どうやらうつかりしたらしい。

彼女は、違う列を覗いた。

「……」

もうひとつ、向こうの列に行く。

「……」

ひととおり、簞の中を眺めながら、脱衣所中を裸で歩きまわった。

しかし 千秋の着物の入った簞は、なかったのだ。

と、とられ、た？

千秋は、茫然と突っ立つハメとなる。

その事実が信じ難く、もう一度全てのかごを見て回るが、先生にもらった汚れた着物と、今日買ってもらった着物の入ったかごなど、どこにもなかった。

どう、しよう。

温まったばかりなのに、千秋は自分の指先が冷たくなっていくのを感じる。

落ちついて。

千秋は、深呼吸をして冷静に物事を考えようと努めた。

先生なら、こんな時どうするだろうか。

そう考えかけて、ああそうかと彼の顔を思い浮かべた。

出てすぐの場所に、きっと先生はいる。

こんな身体で飛び出して行くことは出来ないが、この窮状を訴えることは出来るのではないか。

千秋は、そつと出入り口の方に壁寄りににじりよった。

番台から、かくりと直角に曲がって脱衣所があるので、頭だけ出せそうだ。

「せんせー……」

目の端っこだけのれんの陰から忍ばせながら、千秋は糸目先生を呼んでみた。

驚いたのは、先生がすぐ目の前にいたこと。

番台の老婆の前に、にこにこしながら立っていた。

千秋の遅さに気になって、ここで待っていてくれたのだろう。

助かった。

呼びかけに、ふっとこちらを見た先生に、千秋がほっとしたのもつかの間。

いきなり彼は、その場で着物を脱ぎ始めたのだ。

老婆の目の前で。

番台は、外から丸見えである。

そんな往来から見えるところで、先生は着物と帯を取り去ったのだ。

うわあ。

ふんどし一丁の、先生の出来上がりだった。

普段、着物に隠れて見えなかった肩や二の腕、それどころか引きしまった尻まで見えるその状況で、彼女は固まりそうになる。

荒事に長けた先生ではあるが、前面にはほとんど大きな傷はない。

ただ、何故か背中だけ古い傷が一面に走っていた。

見るだけで痛々しいほどに。

だが、そんな背中も、すぐに見えなくなる。

「はい」

のれんの隙間から、腕がにゅっと入ってきたのだ。

たったいま、脱ぎたての着物と帯が掴まれている。

ああっ！！！

それで、ようやく思い出した。

まっばだかの自分に気づいた先生は、ただ着物を渡そうとしていただけなのだと。

冷静に考えれば、すぐに分かることなのに、余りに見事なふんどし姿を見せられて、頭が飛んで行ってしまっていたのだ。

千秋に渡された着物は、新しい方。

着古した方ではなく、そっちを渡すためには脱がなければならぬ。

顔色ひとつ変えず、先生を睨んでいる老婆は、さすがは裸を見られた商売と言えるか。

「助かります！」

慌てて手を伸ばして着物を受け取ると、千秋は急いで陰で着物に袖を通す。

やっぱ大きいな。

背は、さほど高くない先生だが、やせっぽちの彼女には着物は随分余ってしまう。

しかし、文句は言ってられない。

余る部分を引っ張りながら、千秋は帯で無理矢理縛った。

胸元がすかすかと風通しがいい状態だが、抑える紐も足りないの
で文句は言えない。

とりあえず、体裁だけ整えると胸元を手で押さえながら、千秋は
草履をはいてようやくお日さまの下に出たのだった。

罪と饅頭の重さ 4

「先生！」

湯屋の外に、先生は既に出ていた。

ふんどし一丁で ではなく、着古した方の着物を既に着終えている。

「さあ、泥棒を探そうか」

「はい！」

いちいち説明する必要は、糸目先生にはない。

「一番大通りの、商店通りから見よ」

駆け出す先生。

着物がはだけそうで、千秋は片手でしっかり押さえながらついていった。

ケチな泥棒や、手癖の悪い人間は内町だからといって、まったくないわけではない。

ただし、その数は非常に少ないことを千秋は知っている。

何故ならば、犯罪者として捕まった場合、内町から追放されてしまっただけからだ。

内町の人間にしてみれば、死刑よりも残酷な刑だろう。

だから、子どもは親に厳しくしつけられる。

『悪いことをすると、町から追い出されるよ』と。

それほどの代償を越えて悪さをするということは、よほど捕まらない自信があるからなのか。

それとも。

千秋は、走りながらふと考えてしまった。

それとも、自分を『外』の人間だと分かったから、だろうかと。

随分汚れた、見慣れない娘が湯屋にくる。

見る人が見れば、すぐに分かるのかもしれない。

外の人間なら、着物を盗まれても何も出来ないのではないかと。

よし。

千秋は、頭の中で組み立てた仮定を、とんとんと整えて意識の中にしまう。

大体、納得がいった。

理不尽な事象ではあるが、混乱した頭はおさまったので、次にす

るべきことへ切り替えたのだ。

前を向くと、先生は少し首を左へ傾けていた。

左奥の方の店で、何か騒ぎが起きているような声が聞こえてくる。

千秋は、先生の身体の向こうの景色を見ようとした。

女同士のけんかのようなうだ。

店の玄関あたりで、女二人が掴み合う騒ぎになっている。

それだけ聞くと、自分たちと無縁の出来事のように思えた。

しかし、千秋は見たのだ。

その片方の女性が 古着屋で会ったおばさんであることを。

更に、おばさんはまだ古着屋にいた。

騒ぎは、そこで起きていたのだ。

「ちょっと離してよ！」

「いいや、離さないね！ あんた、その着物はどこから盗んで来たんだい！」

「あたしの着物よ、盗むなんて人聞きの悪い！」

風に乗って、女二人の金切り声が響く。

人々が、おっかなそうに彼女らを避けて歩いているが、千秋はもはやまっすぐにその中に駆け込んでいた。

いつの間にか、先生を追い抜いていたのも気づかなかった。

自分の方が足が速いわけではないので、きつとわざと先を譲ってくれたのだろう。

「おばさん!!」

風呂が台無しになるほど汗だくになったまま、千秋はおばさんを引きはがそうとする女の手首を掴んでいた。

「あ! あんた! あんたあんた! き、着物はどうしたんだい!」

目を転げ落とさんばかりに見開きながら、おばさんは絡まる舌で千秋に問いかける。

「盗まりました」

答えた途端、手首を掴んでいる女が「チッ」と舌うちした。

「離してよ、あたしは知らないよ!」

いい石鹸を使っているのだろう。

女からは、風呂上がりの芳しい香りが漂ってくる。

千秋から着物を盗んで、彼女はすぐに古着屋に売り払おうとした

のか。

まだこの店で粘っていたおばさんは、それを見たのだ。

店にどんな古着があるか、覚えているような人である。

持ち込まれた着物は、ここで買われたものと千秋の着ていた物。

それを見れば、この女性が何をしたか、おのずと想像がつくというもの。

「着物は、店主のどこにあるよ!」

おばさんは、心底ほつとしたように中を指す。

着物の確保だけではなく、逃げようとした犯人まで捕まえようとしてくれていたのだ。

「助かりました、ありがとうございま……」

お礼を言おうとしたら、手首の女が動いた。

掴んでいる手越しに、彼女の身体の動きに気づいた千秋は、さつと足を引く。

思い切り掴んでいるので、手からは逃れられないと分かった女性が、彼女の牛蒡のような足を蹴っ飛ばそうとしたのだ。

足は大きく弧を描いて空振り、体勢を崩す。

その身体の流れのままに、千秋は女の弧の続きを描かせた。

要するに　　転がしたのだ。

風呂を済ませたばかりで、地面に転がる羽目となって、彼女はきつと不幸な気持ちになっただろう。

しかし、着物を盗まれて汗だくになった千秋とて、それは同じことである。

叩きつける気はなかったので軽く落下した女は、何故自分がいま空を見ているのか理解できず、目をぱちくりとさせていた。

「先生、泥棒はどうしたらいいですか？」

くるりと振り返ると、何故か先生は本当に目の前にいた。

「さあ、どうしようかね」

こちらに伸びてくる両手。

「……？」

意図が分からずに見つめていると。

先生は、その両手で千秋の着物の襟を掴むと、ぎゅっと真ん中に寄せてくれた。

あ、あああああ！

何故そんなことをされたのか気づいて、千秋は真っ赤に茹である。

色黒なせいで、ほとんど赤みは見られていないだろうが、彼女自身は死ぬほど恥ずかしい思いを味わっていた。

女を転がした時、千秋は自分の着物の前を抑えるのを忘れていたのだ。

そのせいで、大きくはだけていた。

貧相な胸を、往来でさらしてしまっていたのだろう。

「取り合えず、古着屋さんに入ろっか」

犯人の女の手を受け取りながら、先生は千秋の背を店の中へと押し込んでくれたのだった。

罪と饅頭の重さ 5

千秋は、ようやく新しい女物の着物に袖を通すことが出来た。

古着屋さんに売られる直前で取り返した着物を、その店で着替えさせてもらったからだ。

ついたての陰で着替えながら、おばさんが女にしているお説教を聞くともなしに聞いていた。

「ちょ、痛いじゃないか！ 女を縛るなんて、変態だろ！」

「はいはい、僕は変態ですよ」

そのお説教の向こう側で、先生はどうやら女を拘束しているようだ。

馬耳東風な糸目先生のやりとりに、千秋はぷつと吹いてしまう。

「お待たせしました」

着物を着終えた千秋は、その騒ぎにようやく参加することが出来るようになった。

「だって、あんた外の人間だろ？」

着物の紐で縛られて動けないまま、女は予想通りの言葉が投げつけてくる。

余りに予想通りすぎて、これ以上の尋問は必要ないと思えるほど。

千秋は、ふうとため息をひとつついてから、先生を見た。

どうしたらいいんでしょう、と。

軍人に引き渡すのは、簡単だ。

しかし、そうなると被害について説明しなければならない。

偽の許可証で町に入ったという後ろ暗さもあるし、町の軍人に顔をじろじろ見られるのは避けたい。

既に手配書が回っているかどうかは微妙だが、危険な賭けになる可能性があった。

「思いつくものを、あげてごらん」

先生は、素直に答えはくれなかった。

それぞれの提案の先にあるものは考えなくていいという言外の意を汲んで、千秋は指を立てた。

「ひとつ、詰所に突き出す。ふたつ、二度と盗みをしないように指の一本でもいただく、みつつ、町の外に連れ出す……他になんかありますか？」

考えられる限りを素直に挙げた千秋に、おばさんと女は青くなっていた。

十六の小娘の口から、指をいただくの、外に連れ出すだの聞くとは思わなかっただろう。

おばさんにまで引かれた事実には、千秋は少しバツが悪くなった。

先生は、苦しそうに背中を丸めて笑い出していたが。

「あはは、いい思考だ。最高だね」

胸の中からわきあがる笑いを抑えきれないまま、彼は何度も吹き出しながら、千秋を褒めてくれる。

先生の教えをすぐそばで学んでいるせいで、思考の方向がだんだん町の人とずれてきているのがよく分かった。

だが、一度見た地獄の記憶は、千秋からはもはや決して消えないのだ。

生ぬるい考え方とは、自然と無縁になっていくのかもしれない。

ただ、おばさんのような善良な人を、虐げたいなんてこれっぽっちも思いつきはしないのだが。

「じゃあ、選ばせてあげるよ……いま、うちの可愛い子が言ったみつつの中の……どれがいい？」

縛られて動けない女に、先生は三本の指を突きつけながら顔を近づけて行く。

うまいなあ。

こちらの弱みを見せないまま、先生は女にひとつしかない決断を迫ろうとしているのだ。

千秋のあげた質問は、実質選択肢は2つしかないのだ。

詰所に突き出されると、町の外に放り出されるのは、同じものに近い。

要するに、町から出されるか、指一本差し出すか。

その選択肢なのだ。

女は、さんざん言葉を費やした。

持っているお金をあげるだの、いい着物をあげるだの、先生と千秋を交互に見ながら必死に乞い願う。

そんな言葉に、心の動く千秋ではない。

物やお金に、執着があるわけではないのだ。

いや、先生に買ってもらった着物や、前にももらった着物には意味がある。

勿論、執着もある。

しかし、それは先生にもらったものだからだ。

この女性にもらうものに、何の意味も感じない。

だから、ただ静かに女の顔を見ているしか、することはないのだ。

心の動かない二人の顔に見つめられ、女は最後には泣きわめき始めた。

心底恐ろしいように、何度も何度も詫びる。

手もつけないせいで、古着屋の板張りの床に額をこすりつけ、反省の言葉を繰り返し、解放を乞いた。

その余りのうるささにも動じない二人を見かねたのか、おばさんと古着屋の主人が、口をはさんでくる。

「この女のこととはさ……私らが責任を持って預かるから、その辺にやってとくれないかい？」

「これ以上騒がれたら、商売あがったりだ。おかみさんの旦那と、きちんと相談するからもう帰ってとくれないか」

聞けば、おばさんの夫は、この町の治安を守るの軍人だという。

この近所の人らしく、古着屋の主人とは昔からの馴染みらしい。

千秋は、先生を見た。

先生は、にこにこしている。

いつも通りの笑み。

好きにしていよ。

そう言ってくれているのが、よく分かる。

「では……おばさんにお預け致します。ありがとうございました」

千秋は、そこで初めておばさんに向かって手についてお辞儀をした。

いい人と、悪い人に会った。

それが、今回の千秋の収穫。

足し引きで、結果がどうだとかそういうのは関係ない。

人というものは、一人一人違っていて、数字では何の答えも出ないのだ。

面倒見がよくて、お節介なくらいだが、おばさんは本当にいい人だった。

おそらく、この山吹色の着物を見る度に、これからずっとこの人のことを思い出すだろう。

この女は、悪い人だった。

どんな詫びや反省の言葉も、千秋の心には何も響かない。

いま泣きわめいているのも、自分の身かわいさのためだけだ。

本当に詫びる気がある人間ならば、こんな言葉を駆使することはない。

指の一本も自分から差し出せば、彼女の心も少しは動いたかもしれないというのに。

痛いのもいや、町の外の怖いのもいや。

それなのに、悪いことはする。

余りの小ささに、千秋はもはや怒りの気持ちひとつ浮かびはしないのだ。

おばさんにはお礼を、女には静かな視線を。

千秋は、『人』を見て、見合う態度を取る。

それが、これまでの旅で彼女が身につけてきた、心の中の土台になっていた。

その土台の上に建てられた建物に、いくばくかの人がいる。

屋根の一番てっぺんで遠くを見ている人は、たった一人。

「じゃあ、行こうか」

細い細い瞳で笑う

千秋の先生。

罪と饅頭の重さ 6

「かわいそうに……」

別れ際、おばさんは千秋を抱きしめながら、同情深げにそう呟いた。

目に涙をいっぱいためて、本当にかわいそうなものを見る目をするのだ。

何だかんだで、外は夕日になっていた。

おばさんは、千秋たちに家に泊まるように勧めたが、先生の確認を取るまでもなく断った。

彼女の夫が軍人であるというのならば、とても泊めてもらうことなどできない。

いろいろ騒ぎを起こしたので、さっさとこの町から去るに限る。

「かわいそうじゃ、ないですよ」

千秋は、おばさんに笑ってみせた。

嘘の笑みは、浮かばない。

心の底からの笑みを浮かべて、おばさんに見せたのだ。

千秋は、ひとりではなく先生と一緒にいる。

そして、他の人たちのことを、ひとりひとり見られる目を育てて
もいる。

おばさんの目から見れば、千秋は無邪気でいられない辛い人生を
送っているように見えるだろう。

けれど、それは今や不幸なことではなかった。

だから、彼女はおばさんの言葉を否定して、笑顔を浮かべること
が出来るようになったのだ。

「お元気で」

次にこの町に来られるようになるのは、いつになるか分からない。
もう、永遠に来ることはないかもしれない。

これからは、記憶の中に『いい人』として、千秋の中におさまる
だろう。

そんな人に別れを告げ、先生と歩き出す。

「夕食に饅頭でも買って行こうか」

さすがに、今日はもう狩りをする時間もない。

先生が、門の方に向かって歩きながら、先にある店を指す。

「あんこの饅頭がいいです」

肉餡の饅頭もあるが、肉は先生のおかげで足りている。

外では食べられない甘い物を、千秋は欲しいと思ったのだ。

「うんうん、何でもたくさん食べていいよ」

ぼんぼんと頭に手を置かれる。

何気ないその言葉と態度に、彼女はすこし引つかかった。

すうっと視線を下げ、自分の着物の胸を見る。

「やっぱり、もうちょっとお肉つけた方がいいですね」

この洗濯板を、今日のご披露してしまったのだ。

思い出すだに、肌がぴりぴりするほど恥ずかしい。

「肉をつけたからって……往来で見せていいわけじゃないよ」

先生が、少しばかり心配げな目で、こちらを見た。

「見せたくて見せたわけじゃないです！」

千秋が顔を真っ赤にして反論すると、先生は愉快そうにくすくすと笑う。

そんな馬鹿馬鹿しい話をしながら、熱々の饅頭を買う。

先生は、あんこと肉の饅頭を別々に袋に入れてもらっていた。

そんなに山ほどの数ではないのだから、ひとつでもよさそうなものを。

不思議に思いながらも、千秋は袋をひとつ受け取った。

それを抱えたまま、先に千秋は門を出た。

行きと同じように、バラバラに出ることにしたのだ。

門番に曖昧な会釈ひとつして、千秋は歩いていく。

少し遅れて、先生は門を出てくるだろう。

なのに。

「ちょっと待て」

後ろで、問題発生の声がした。

先生は、門番二人に止められてしまったようだ。

千秋は。

振り返らなかった。

そして、同時に分かったのだ。

饅頭の袋は、『もしも』の証。

もしも、二人がばらばらになることがあっても、どちらも困らないようにするためのもの。

先生が、千秋のために用意してくれた、愛情のこもった保険だ。

だが、一人になる心配など、千秋はしていなかった。

自分ならまだしも。

先生に、『もしも』が起きる可能性など、余程の事以外はあり得ないのだから。

「うわっ！」

「ぐおっ！」

男二人の悲鳴があがる。

勿論、それは先生のものじゃない。

駆けてくる音は、静かだ。

足音がないわけではないが、無駄に土を蹴る音がない。

「はあ、参った参った」

明るい声に、千秋は前を向いたまま、自分の唇が緩むのを感じていた。

さすがは先生だ、と。

千秋の信頼の、頂点にいる男である。

「少し走りますか？」

「そうだね、そうしようか」

そして 二人で饅頭の袋を抱えて走った。

「あ、こっちがあんだったね」

逃げた後。

先生は、自分の袋の饅頭を確認して、千秋と袋を交換した。

糸目先生も、すっかりすることなんかあるんだ。

そう思いかけて、彼女は首を傾げた。

いや、そんな抜かりはなさそうだと。

もし、この袋の中身の間違いがわざとだったとするならば、皮肉が混じっている気がした。

もしあのまま、先生が捕まっていたら、千秋は一人で自分の袋の

饅頭を食べただろう。

あんこではない饅頭を。

その時、彼女はきつと自分の観察力のなさを知ると同時に、あんな饅頭と共にいなくなった先生を深く恋しがるだろう。

いや、勿論、あんな饅頭がなくても恋しいのだが。

そんな未来のことまで想定された、先生が布石した優しい皮肉。

今日。

千秋はそれに。

初めて気づいた気がした。

『罪と饅頭編 終』

みつつ目の自分 0

先生は、こう言った。

「そろそろ冬になるね……どこで冬を越そうかな」

千秋は、その言葉を拾って頭の中で転がす。

日々、野宿の生活はだんだん厳しくなっている。

既に穀類の収穫時期も終わり、外村で仕事にありつくことも出来なくなつたため、二人は冬の身の振り方を考えなければならなかつた。

問題は、住むところだろうか。

千秋は首をひねるが、心当たりなどあろうはずもない。

そんな彼女を、糸目先生は細い瞳のまま見つめている。

その様子は、千秋の答えを待っているような気がした。

先生は、よく言うではないか。

『可能性をあげろ』と。

それが、実現可能かどうかは別として、思いつくものをあげれば、きつといいのだ。

「ええと……ひとつ、どこかの山小屋に住む。ふたつ、外村に住まいを借りる。みつ……」

千秋は、つらつらと可能性をあげながら、先生を見る。

彼の表情は、少しも変わってはいない。

「みつ……内町で過ごす」

野宿以外で言えば、こんなところだろう。

先生は、頷きも相槌もない。

微笑んだまま、千秋を見つめるだけだ。

「じゃあ、いま挙げた中の、どこで冬を越したい？」

穏やかで揺ぎない声。

千秋の挙げた可能性の、どれだって簡単に手に入れてしまいそうな安定感が、声の全てから漂っている。

きつと、先生ならばどれも可能なだろう。

本当に、どれも可能だと言うのならば。

「どこかの……山小屋で冬を越したいです」

千秋と先生が、出会った時に暮らしたような、粗末な小屋で構わない。

あの時間がもう一度戻ってくるのならば、それに触れたいと
千秋はそう思ったのだった。

みつつ目の自分 1

夕闇が、すぐそこまで迫っている。

冷える風に追われてたどり着いた山道の先に その小屋はあった。

前に見た、先生の炭焼き小屋と寸分たがわないようなそのたたずまいに、千秋は思わず前の山に戻って来たのではないかと錯覚したほどだった。

だが、それは違うのだとすぐに分かった。

なぜならば、その山小屋からは煙が上がっていて、今まさに誰かがそこに住んでいるのだと教えてくれたのだから。

建てられて随分時間のたった小屋の木材は、煤や汚れで黒ずんでいる。そんな壁際には、割られた薪が無造作に積んであり、いまにも崩れそうだ。

細かいことを、余り気にしない人が家主なのだろう。

何の迷いもなく小屋に近づき、先生は戸に手をかける。

「誰『が』いる？」

先生は、とても奇妙な問いかけと共に、それを遠慮なく開けたのだ。

返事は。

「げえ」という、低くうめくような男の声だった。

「何だ、とつじ藤次か」

「いや、それより『げえ』に反応しろよ。歓迎なんか、これっぽっちもしてねえから、さっさと帰れ」

どうやら、知り合いのようだ。

好意的な知り合いかどうかはまだ分からないが、少なくとも先生の態度からすると、悪い相手ではないだろう。

たとえ、向こうの男の態度がつっけんどんでも。

小屋の床板が、近づく足音と共にミシミシと音を立てている。相
当、床が悪くなっているのか 男の体重が重いのか。

入り口に近づいてきた男は、ようやく先生の後ろに立っている千秋の視界へと入った。

きこりかマタギと言われれば、あっさり納得できそうな立派な体
躯の男だった。

背は先生よりももう少し大きいくらいだが、とにかく見事な働く筋肉の持ち主だ。

着物の上から獣の毛皮の上着を羽織っていて、温かさと野趣に溢れいる。

その毛皮も相まって、まさに熊と言った印象だった。

「お前が来ると面倒なんだよ。頼むから俺をそつとしとけ」

そんな熊顔を思い切り顰めながら、手はしつしと先生を追い払おうとしている。

「僕の小屋を空けてきたから、冬の間、藤次はそっちに住むといい。僕とも顔を合わせないから、それで文句はないだろう？」

先生は、終始にこやかだ。

だが、言葉には一切の遠慮はない。

それほど、遠慮のない間柄ということだろうか。

そう考えると、千秋は藤次と呼ばれた男が、少しうらやましく思えたほどだ。

彼女が先生に、何か遠慮しているというわけではないのだが、言いたいことを言い合う対等な関係というわけではない。

「いやだから、俺はここを離れたくねえの！　そこで、お前の顔も見たくねえの！　分かるか、春一？」

あつ！

つれない藤次の返事に、千秋は大きく反応してしまった。

いま。

いま、彼は言ったのではないかと。

『はるいち春一』と。

まるで人の名を呼ぶように、先生に向けてこう言ったのではないか。

はるいち、はるいち。

それが先生の名前に違いないと、慌てて千秋は唇の中でその名前を復唱した。

初めて知ったその名に、自然とときどきしてしまう。

絶対に忘れないようにしようと、何度も何度も繰り返しているとふと、視線を感じた。

顔を上げると、藤次が自分を怪訝そうにじーっと見ている。

「何だ、このちんちくりんは？」

藤次は、とても正直で、言葉を飾らない男だった。

その、余りに素直な一言は、まっすぐに千秋を突き刺す。

色気がないという自覚はあったが、まさか『ちんちくりん』なる、素晴らしい言葉で形容される日が来るとは、思ってもみなかったのだ。

「千秋だよ」

へこたれそうになる彼女の前で、先生は一言そう言った。

「は？」

意味を理解出来ていない藤次が、大きく首を横に傾ける。

「ちんちくりんじゃなくて……千秋だよ」

後ろ手に伸びてきた先生の手が、千秋の腕を掴んで前に引っ張り出す。

先生の身体より前に出されると、ものすごく藤次との距離が詰まった。

見事な筋肉のおかげで、熊に覆いかぶさられているような圧迫感があった。

だが、先生がわざわざ彼女の名を呼んで、紹介してくれたのだ。

ここで怯んでは、女がすたる。

「ち、千秋です。どうぞよろしくお願いします！」

背中ぴしっ、お辞儀しゃきっ。

千秋は、学者先生でも前にしたかのように、しゃちほこばって挨拶をした。

「……」

藤次は、そんな彼女にしばらく黙り込んだ。

そして、視線を先生に向けるのだ。

「で……このちんちくりんが、何だって？」

彼にとって 千秋の名前など、どうでもいいことのようにだった。

みつつ目の自分 2

「俺あ、お前が嫌いだし、こっちに来て欲しくなかったんだがな」

藤次の言葉は、首尾一貫していた。

とにかく、先生に側に寄って欲しくないようで、自分が出て行くのも持つての他なら、ここに居座られるのも御免のようだ。

ただ、いまずぐ実力でたたき出すという真似はせず、外が暗くなっているを見て、中に入れてくれるのだから、根はいい人なのだろう。

囲炉裏の側に座ることが出来て、千秋はその温かさに本当にほっとしたのだ。

寒いのを辛いと考えてはいなかったが、こうして熱の側にいると、身体は辛がっていたのだと実感する。

「そうか、じゃあしょうがないな……出て行くとするか」

そんな千秋の横で、先生は藤次ではなく囲炉裏の火を見ながら、笑みの音を漏らした。

残念ながら、ここは冬の住処にすることは出来ないようだ。

望んだ山小屋が駄目なら、あとは何だったかと千秋が思い出そうとしていたら。

「じゃあ、この山の下の町で冬越えをしようか」

あっさりと先生が、次の候補を挙げてくれる。

顔をこちらに向けて、それでいいかと確認するように見てくるので、彼女は頷こうとした。

千秋は、無理を言いたかったわけではないのだ。

ただ、先生に無理なことなどないように思えて、それならばと掴んだ選択肢である。

第二希望が内町だったわけではないが、彼が選んだというのなら、否定する理由はなかった。

そう頷こうとしたのに。

「うわああああ！ やめろおおおお！！！！」

突然。

突然、藤次が吠えた。

これまでのどんな拒否よりも強く、いまにも先生に襲いかからんばかりの勢いで。

その音量と勢いに、千秋はびっくりしつつも身構えてしまった。

反射的に、襲われた時の態勢を取ろうとしたのだ。

昔ならば、こんな男が大声を出したら、身が固まってしまったというのに。

先生との旅で、少しずつ自分が変わっていつているのを実感する瞬間でもあった。

「わ、分かった！　お、俺が内町に住む、お前たちはここを勝手に使っている！！」

わなわなと震える両手を、無意味に振り回しながら、ひどく狼狽した様子で藤次はわめき散らす。

「そっか、じゃあここを使わせてもらっよう」

そんな彼の有様に反応するでもなく、ただ先生は投げつけられた言葉を上手に受け取るのだ。

理由は分からないが、どうやら先生は藤次の嫌なところを的確に突いたらしい。

でなければ、さっきまであれほど抵抗していたことを、覆すはずなどないのだから。

「ああああ、ちくしょおおお、ぶつとばしてええ！」

心底嫌でたまらないように、彼は大きな身体をそりかえらせるようにして頭を抱える。

そんな大きな動きをするたびに、床板はみしみしと軋み、囲炉裏の火さえも大きく揺らぐ。

先生とは真反対で、無駄な動きが大変に多い人のようなのだ。

そんな激しい情景とは裏腹に、千秋はすっかり心穏やかであった。

事情はどうあれ、ここで先生と冬を越せることが決まったのである。

しかし。

まだ、往生際悪くうおうおと呻き続けている藤次が、少し気になった。

先生がここに住むよりも、近くの内町に住む方が嫌なんてどうしてだろう、と。

先生自身のことは、何となく聞きそびれるままここまで来てしまつて、今更問いかけるのも間抜けな気がする。

しかし、今日出会ったばかりの藤次のことならば、すんなり聞きやすい気がした。

「内町に、何があるんですか？」

素朴な疑問として、千秋はそれを先生に聞いてみた。

瞬間。

藤次の大きな動きが、ぴたりと止まる。

まるで時を止めたように、本当にぴたりと。

「ああ、うんうん……多分、町には花枝はなえがいるんだよ」

余りに不自然な男の状態を、千秋が二度見しようとも、先生はまったく変わらない。

言葉を淀むでも濁すでもなく、ずばつと言い終えた。

先生に関する質問も、全部こんな風に返ってくるのではないかなんな気がするほど。

「うおおおお、ちくしょおおおお!!!」

突然、藤次の時が戻った。

千秋が、花枝なるものを理解するよりも速く、彼は上半身を激しく前後に振り立てる。

囲炉裏の灰が舞い上がる勢いに、千秋はそこから膝で少し逃げた。

そして、先生ににじり寄る。

「花枝って何ですか？」

それは、どうやら藤次の泣き所らしい。

彼に聞かれると、もつと暴れそうな気がしたので、わめき声の隙間からそつと聞いてみた。

すると。

「花枝は、藤次の思い人だよ。でも、あの子は昔から僕を好きでね。藤次は、花枝にさんざん袖にされてるのに、まだ諦めきれないんだよ」

何ともあつさりと。

先生は、彼の秘密を暴露した。

勿論、声の大きさはまったくもって普通どおりだ。

そのとどめに、ついに藤次は床にのたうちまわり始めるではないか。

ええと。

千秋は、それらにうまく反応出来ずにいた。

藤次の暴れっぷりに、ではない。

先生がさらりと言った、千秋にとってはとても気になることなのせいであった。

みつつ目の自分 3

『あの子は昔から僕を好きでね』

衝撃的だったのは、その部分だろう。

先生にとっては、まるで挨拶みたいに気楽に吐かれた言葉。

この時、ふと思ったのは。

千秋が羽織っているこの赤い着物が、彼女のものではないかという想像だった。

もしそうだというのなら、花枝と言う女性は先生と一緒に暮らしていたということになる。

先生のことを好きな女性と、二人で暮らす。

しかし、千秋の想像は、入口で途切れた。

うまく想像が出来なかったというより、既視感にとらわれたせい
が大きいだろう。

自分と先生の関係が、それとよく似ているのだ。

彼は、千秋には手を出さなかった。

いろいろ接触はあったが、それにはまったく決定打はない。

先生は、女なら誰でもいいという考えを持っている人ではなかった。

それを、千秋は自分の身を持って理解している。

ということは、彼女とのことも考えるだけ無駄だった。

先生にその気があるのならば、千秋がどう思おうが、結果は何も変わらないのだ。

過去は動かしようがないし、今後のこともどうしようもない。

少なくとも分かっているのは、先生は自分にはそういう意味で興味が無い　ということだけ。

そして、もうひとつ分かっていること。

彼女も自分も、先生のことが好きだ、ということだ。

糸目先生の良さが分かるなんて、一体どついう人だろう。

心に隙間風が吹き込むのを感じながらも、千秋はそんな風にはへこたれなかった。

「花枝さんって、どんな方なんですか？」

彼女の問いに、先生は何故かぷつと吹き出す。

「花枝はなあ！」

彼に、笑った理由を聞き出すより先に、暴れていた藤次が大きな口を挟んできた。

「花枝は、まるやかでしつとりしてて、こつ女らしくてなあぁ！」

拳を握りしめたかと思うと、すぐさまその手を開いて女性の曲線を描き始める。

大げさな描き方だろうが、胸腰尻を強調する動きに、とりあえずこういう身体つきの人であるかは分かった。

「とにかく、ちんちくりんとは真逆の、色香たっぷりの美しい女だ！」

「だから、千秋だって」

唾を飛ばしながら力説する藤次と先生は、まさに真逆だった。

そう考えると、真逆というのも意外と悪い話ではない気がする。

少なくとも、彼が千秋を『ちんちくりん』と呼ぶ度に、先生は冷静に訂正を入れるのだ。

その度に、『千秋』と呼んでくれる。

二人でいる時は、そんなことはほとんどない。

『君』と呼ばれることはあるが、面と向かって名前を呼ぶことなどなかった。

それは、千秋も一緒だろう。

今日の今日まで、先生の名前を知らなかったのだから。

そして。

どうして藤次という男が、花枝に好かれないのか、何となく分かった気がした。

彼が褒めたのは、全て外見に関するものだったのだ。

先生が人を褒めるとしても、おそらくそんな褒め方はしないだろうし、もし外見にこだわるのであれば、千秋など助けようとは思わなかっただろう。

「ところで……こいつは何だ？」

藤次の顔を見ながら、彼女が失礼なことを考えているなど知りもせず、そしてようやく少し冷静になったのか、千秋の存在について問いかけてくる。

彼女が、花枝のことを疑問に思ったように、向こうもまた千秋のことを疑問に思っているのだろう。

さっき、名乗りはしたものの、『何か』について明確に答えることはなかったのだから。

だが、その視線と質問が向いている先は先生であって、自分ではなかったが。

「ん？ 何だっけ？」

そんな藤次の球を、糸目先生は軽く彼女に投げて寄こす。

先生にとって、千秋とは何か。

彼は、自分で答えることをせず、千秋に答えさせようとしているのだ。

どきつとした。

それは、深い意味のある問いかけに感じたのだ。

ここで彼女が答えた関係を、先生は素直に飲み込むのではないかなんな気がしたのである。

白紙を、差し出されている気がした。

何と書いてもいいと、言われているのだ。

一番、周囲を納得させられそうなのは、『師匠と弟子』だろう。

実際、千秋は彼をずっと『先生』と呼んでいるのだから、それが一番自然なのだ。

けれど、それを口にした瞬間。

彼とは、永遠に師匠と弟子で終わってしまう気がした。

では、『恋人』になりたいのかと言われると、正確ではない気が

した。

淡い希望とか、少女らしい夢とか、そういうものの先に先生がいる気がしなかったのだ。

近くにいながらも遠い背中。

千秋には、まだ彼の背中しか見えていない状態なのだ。

そんな今、彼女に言えることと言えば。

「私は、先生の背中……向こう側を見てみたいです」

藤次の質問の返事としては、それは随分おかしいものだったはずだ。

実際、彼は意味が分からないように、大きく首を傾けている。

しかし、千秋が見ているのは藤次ではなく、答えを返すべき先生の方。

先生は。

「ああ……そう、それは、楽しみだ」

先生は 爆笑していた。

みつつ目の自分 4

宣言通り、藤次は翌日には山を下りて行った。

千秋と先生の関係は、これまで通り何も変わることはない。

多くの移動を必要としない生活は、冬の日々を穏やかに過ぎ去らせていく。

渡り鳥を狩る方法を教えてもらったり、稽古をつけてもらったりしながら、彼女は幸せな時間をすごしていたのだ。

そんなある日、先生が言った。

「そろそろ、町に売り物に行こうかな」

千秋は、先生のその言葉をぱくんと飲み込んで考え始めた。

おそらく、先生はどちらでもいいのだ。

彼女が、ついてこようがこまいが。

欲しいものはある。

山水の冷たさは容赦なく、千秋の手は多くのあかぎれでひどい有様だった。

元々、綺麗な手ではなかったが、とても人には見せられない。

人と言つても、ここにいるのは先生くらいなのだが。

あかぎれの膏藥　それは、藥の中では割と安めのはずである。

「何を考えてるか、言つてごらん？」

その質問は、『何』だった。

前に聞かれた、千秋は一体『何』なのか。

どちらも、彼女の頭の中にあるものを、見たがつているもののように思える。

思わず、千秋は先生を見ていた。

賢さを求めているものとは、違う問いを投げる彼の目に、どんな色が浮かんでいるか見たかったのだ。

しかし、それは愚行だった。

細く細く、感情を見せない先生の糸目を読みとれるほど、千秋は修行出来ていなかったのである。

「渡り鳥を何羽捕まえれば……あかぎれの膏藥が買えるのかな、と」

千秋は、先生には嘘はつかない。

思っている通りのことを、そのまま口から溢れさせた。

先生は　声を出して笑う。

どうして笑ったのかは分からないが、千秋の答えはどうやら先生のツボにはまったようだ。

「じゃあ、明日は朝一番で鳥を狩りに行くことにしよう」

結果的に、一緒に町に行くことになったのだった。

二人は、前と同じように別々に町へと入った。

千秋は山の物売りに、先生は灰色の頭巾をかぶってというところまで、まったく同じだった。

門番は、背中に渡り鳥の籠を背負った千秋が差し出す許可証を、じつと見た。

前の門番は、一旦許可証を受け取って眺めたというのに、この男は千秋に持たせたままだ。

何か、怪訝なことでもあるのだろうか。

この許可証は、偽物である。

だが、どうも門番が許可証の文字を、目で追っているようには見えなかったのだ。

「入ってよし……あー、商店通りから西にふたつ辻を入ったところにある薬屋は良心的だから、余裕があるようなら寄るといい」

彼は、とても同情深い声音でそう言って、千秋を通してくれた。

許可証を疑っていたわけではなく、彼女のひどい手を哀れんでくれたのだ。

だが、それでいい人だと思ひ込むようなことはしない。

何しろ、相手は軍人なのだ。

もしも千秋が、許可証を持っていなければ、この男はいくら同情しようと彼女を町に入れずに追い返すだろう。

あるいは、先生と千秋の正体を知れば、目の色を変えて追い回して捕まえようとするだろう。

ぺこりと会釈をして、千秋は町の中に入って行った。

この町は、入るといきなり分かれ道になって、それぞれの大通りにつながっている。

中央の道が、商店通り。

食べ物屋関係は、西側にあるので商店通りよりひとつ西の道に入るように先生に言われていた。

よいしょと籠を背負い直し、千秋は歩き始めた。

朝の商店の裏通りは、活気に満ち溢れている。

飲食店などの店主が、食材の仕入れのために、あちこちで行商人を捕まえて交渉している。

野菜のほとんどは町の中の畑で作られたもので、毎日のやりとりのひとつとして和やかに会話が交わされていた。

しかし、千秋の背負っている物を見るなり、仕入れの男たちの目つきがギラッと変わった。

「お、鴨か。けど、豚と鶏は仕入れてあるからな」

「無理して使う食材じゃないな」

いきなり、数人の男が千秋を取り囲み、ダメ出しが始まった。

余り大きくない彼女の頭の上で、男たちが言葉を投げ合う。

「10……いや、9星^{せい}なら買ってもいいが、それ以上となるとなあ」

一人の男の挙げた価格は、非常に安いものだった。

おいしい鴨の肉を捕まえて、饅頭三個分とはどういう料簡なのか。

それほど、この町では鴨は人気がないのだろうか。

「そうだなあ……9星くらいなら妥当かね」

頷く男たちを見上げて、千秋は首を傾けた。

1羽いくらで売るか、ちゃんと先生に聞いておけばよかったが、いまさら慌ててもしょうがない。

少なくとも、焦って売するような金額ではないことだけは分かる。

「そうですか、では他を当たってみます」

千秋は、軽く会釈を残して、更に商店裏通りの奥へと進もうとした。

「おっとっと、分かった分かった。10星払うから、背中を売ってくれ」

そんな彼女の目の前に、男は回りこんで来た。

足を止めた千秋は、ようやく分かった。

彼らは、この鴨を　買い叩こうとしているのだ、と。

この通りに入って、一番最初のお客が彼らだった。

外から売りに来る物を、狙いやすい位置。

千秋が見慣れない小娘だったので、きつと舐められたのだろう。

文字通り、千秋を『鴨』にしようとしたのだ。

「結構です」

前の男をよけようとしたのに、同じほうに一歩足を踏み出され、また前がふさがれた。

「分かったよ。じゃあ、十二星でどうだ。悪くない話だろう?」

投げ飛ばせば、どんなに楽だったろうか。

しかし、まだ千秋は先生と合流もしていないし、いきなり騒ぎを起こすわけにもいかない。

ふと。

彼女の脳裏に、ある人の名前が浮かんた。

「花枝さんって、ご存知ですか?」

広い内町である。

しかし、同時に言えば、ほとんど人の入れ替わりの少ない町でもあるため、目立つ商売をしていれば、いろんな人に名前を覚えらるる。

藤次が、あの時褒め称えた花枝の容貌が本当ならば、この町の男が彼女のことを知らないはずはないのではないかな。そう思ったのだ。

「花枝って……花枝姐さんのことか?」

ざわっと、男たちの反応が変わった。

どうやら、相当有名人のようだ。

「この鴨、その花枝さんに頼まれたものなので……他の方には売れないんです、すみません」

千秋は、嘘八百をつらつらとあげつらった。

真実を多くの人で共有することには、何の意味もない。

自分が信じている人にだけ、本当のことは意味のあることなのだ。

「ああ、『春屋』^{はるや}に納めるものか。それは悪いことをしたな」

男たちは、慌てて道を空けてくれた。

千秋が、次の一步を踏み出した時。

「そのあしらい方は、想像してなかったよ……面白いこというね」
すつと。

既に頭巾を取った先生が、真横に並んで来たのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880y/>

春と秋

2012年1月12日18時55分発行